ワイキキの濱邊に行けば冬といふに海水浴のにぎはひてあり。

常夏の國にすみをる人たちは心ゆたかに肥えふとりをり。

朝毎にパパイヤをくひマンゴーもくひてうれしきホノルルの宿。

日毎夜毎熱帶らしき大粒の雨の音きくまたたのしかり。

ホノルルの水族館をおとなへばいろいろの魚の泳ぎをるかな。

いろいろの衣きかざりて遠くきし人迎へるとはねまはりをる。

とぼけたる顏したるありあわてたる顏したるあり魚らはきまじめくさく迎へをるかな。（昭和八・二・一三）

ヒロにて

山をこえ谷をわたりてゆけどゆけどさときび畠に離れざるかな。

大雨にさらさらさらと音がするきびの山道ふみてかへれり。（昭和八・二・二〇）

みほとけに捧げられたる花の香をふかく吸ひつつ法を聽くかな。

花ずきの我は日毎にみほとけのいろいろの花をなつかしみをり。

そのうちの珍らしき花を家づとにせんとて文の中に挾めり。（昭和八・二・二五）

椰子の樹の林をゆけば白々と日々草の咲いてをるかな。（昭和八・二・二六）

あかあかと陽の照り雲も見えざるに何處よりかは強き雨ふる。

海ぞひのラハラ林のあちこちにカナカ人住む小さき家見ゆ。（昭和八・二・二八）

雞の多き島かな夜もすがら　鷄のこゑのつづき聞ゆる。

めづらしき眞白の花をほむる聲に夢さめぬれば窓白みをり。

大いなる岩の切れ間ゆぶすぶすと煙ふきでる岩ふみあるく。

煙たつ岩間の小岩ひろはんと寄れば熱さの手に傳はれり。

みほとけに命ささげて勇ましく生くる人はもその手とらまし。

ココナツの實の總なれる丈高きココナツの樹に月のかかれり。

御供養を樂しみとせる黍つくりの家に招かれてもてなされけり。

講話果てまた彼の家に立ち寄りて茶がゆの馳走をうけにけるかな。

唐辛の太き幹もてつくりたる杖もらひけり村の教師に。

香の高き栴檀の樹の杖貰ひ子供のごとく悦べるかな。

遠國の島のキャンプにゆくりなく抹茶よばれて月の海みる。

佛教の信心あつき村にきて白き鳥居のみ社を見る。

大和人は何處にゆくも寺をたて社をまつる奇魂をもつ。（昭和八・三・六）

ワイルクにて

夕ぐれのゼランダに煙草を吸ひをれば花の匂のしめる風ふく。

ゼランダの前を覆ひて青葉なすキャップフラワーの高く匂へり。

大いなるキャップフラワーの香をしめる夕の風のなつかしきかな。（昭和八・三・一六）

パパイヤを日毎朝餉の膳に見る春のハワイの旅のうれしさ。

砂糖黍にさらさらさらと風わたる春のハワイの空うつくしき。（昭和八・三・一七）

谷川の朽ちかかりたる橋に立ちニッヅルポイントを仰ぎみるかな。

空をつくニッヅルポイントの峯の上に白雲かかる神おはすごと。

島人が追ひつめられて血まみれに戰ひし谷とふ瀬の音高し。

ワイアフの海邊に立てばどこからか砂糖くさき風の吹いてくるなり。

海沿のゴルフリンクの青草に自動車多く乘りすててあり。（昭和八・三・一八）

入海の向ひの山に沈みゆくあかき陽を見て涙せしかも。（昭和八・三・一八）

海をぬく四千呎の高丘に牧場ひろびろ雲雀なくなり。

山路をうねりうねりて登りゆくシャボテンの丘に雲雀なくなり。（昭和八・三・一九）

ラワイビーチガーデンにて

丈高きジンジャにそうてときいろの花を見あげてただに驚く。

ジンジャとしいへば大和の茗荷ぐさその太幹のにぎりかぬるも。

川沿の崖に青々月に咲くナイトブリューメンシリースを見る。

松の樹に高くからめる蔦かづら日傘の如き大き葉を見る。

老人がただ一人住む庭園にいろいろの花の咲き匂ふかな。

草とりにハローといへば答せずふり向く顔のまくろなるかな。

とらの吠ゆるごとき音して岩間より潮の高く噴き出づるかな。

時をおきて高くふき出る潮を見てわだつみの意氣をおもひをるかな。

ククイヲロノ公園にて

園に入れば孔雀しづしづ芝生よりアイオンウッドの蔭に入りけり。（昭和八・三・二三）

ワイメアにて

珍らしきスターアップルの樹を見んと友にさそはれ家を出にけり。

その森の妻が丈なす竹もちてスターアップルをとりてくれけり。

珍らしきスターアップルを手にもちて寫眞とりけり芭蕉にそひて。（昭和八・三・二七）

ホノルルにて

人に逢はず壁に向ひてまる九年人まちをれば人の來にけり。

（畫に題して）（昭和八・四・四）

ハワイ島にて

牛がなくワイメアの丘にたたずめば冷たき風の頰をなづるかな。

しづしづと道を横ぎる牛の群を車とどめて眺めをるかな。

その中の小さき牛がよちよちと母を追ひゆく可愛かりけり。

いろいろの粧ひしたる牛あそぶ山の牧場にひばりなくなり。

海ぞひの青草原に立ちつ居つあまたの馬のあそびをるなり。

草原に立ちてま白の波みればみそらに飛行機のうなりとびゆく。（昭和八・四・一〇）

自動車の繕ひを待ち休みをれば赤きいちごをとりてたびけり。

白き花赤き實のなるコーヒーの樹いとめづらしく樹をたわめ見る。（昭和八・四・一四）

磯ぎはに車をとめて椰子島の月見てあればこほろぎのなく。（昭和八・四・一五）

淺間丸にて

英國の軍艦見ゆと人達のデッキにたてば吾もでてみる。

甲板にたちてみれども船は見えずただ海づらのうすくくもれり。（昭和八・四・九）

ハワイにてあひし人々の一人一人思ひ浮べて禮をいひをり。

どの人もみなそれぞれにうるはしき性に見ゆるをなつかしむかな。

年五十はじめて外國の旅にいで八年へて今四たびそをせり。

秀でたる才なき吾にいかにして幸の日のかくも惠まる。

常夏の國に旅してふるさとのさくらの春にそむきけるかな。

ふるさとの門邊のさくらせめてはも一花なりとも咲き殘りてん。

みづみづし若葉の國にかへりゆく春の海ふく風に追はれて。

いねがてにゐるらん人の誰彼を念ひて吾もいねられなくに。

ともなひし吾子を殘してかへるふねに友の愛子をあづかりてきし。

外國に育ちたる子の日の本の言葉かたんじだまりがちなり。

船に醉ひて三等室になやむ子を見まひてキャビンにかへるせつなさ。

吾子ならばよもすてておかじかへりみて冷ききさがを愧ぢてをるかな。

をりをりにキャビンに呼びて美しき清きベッドにやすましめけり。

見はるかす太平洋を往く船に小さきわれをまざまざとみる。

しろじろと跡をのこして船はゆきその泡の道すぐに消えゆく。

海に入る日のあと追うて吾が船は西へ西へとひたに走れり。

甲板にくぢらまくはり向島の花見よそほひしつらはれけり。

汁粉やののうれんくぐり汁粉たべつとなりのおでんやの歌をきくかな。

汁粉をといへば假裝の小娘の男聲してはいとこたへぬ。

おもしろく腰うごかしてお汁粉を運ぶ假裝の女をかしき。

ふねはいま今戸あたりをすぐるらし絃歌の音の水にひびけり。（昭和八・四・二〇）

あかつきに旭を拜み夕ぐれに夕日を拜み念佛するかな。

あさまだき經を誦しつつ甲板をめぐりてあれば海に日の出る。

ふねについて遠き旅路をめぐりきしあのかもめさへうれしげにとぶ。

午後二時半一等船客撮影す。松岡洋右氏と握手す。

夜甲板にて花火揚げらる。

太平洋のまん中走る船の夜花火うち揚げさざめきあへり。

明かにものの見えぬに空にちる花火ほのかに見えてうれしき。（昭和八・四・二一）

人の世に人のなさけにふれ得ざる人のこころのあはれなるかな。

寒風の加ふるにさへふるさとの近づく故とよろこばれぬる。

三等の部屋にはいればむしあつく荷物のやうに人つまれあり。

むしあつき部屋をぬけいでいこふべきデッキにせまくものおかれあり。

人の世によきはたらきをせし人の多くがふねのそこにいねあり。

われに何の徳のありてかすぐれたるキャビンにいぬるそらおそろしき。

この上の少き部屋におきふしてなほものたらぬことの多かり。

をりをりは心にみたぬことのあり煩悩具足の凡夫なるかな。

おもひみれば過ぎにし三月み仕事のさはらですぎぬ冥加あればぞ。

人々のいぶかるほどに働けりされども吾は肥えふとりをり。

こころをこめしもてなしうくるにならされて常のもてなしに心みたざり。

葉ざくらのふるさと戀ひし筍のふるさと戀ひし人なほ戀ひし。

蛙なくふるさとの野邊をしのびつつ太平洋の船にねるかな。

風はややつよくふけども波立たずゆるぎすらなく船は走れり。

食堂にゆくことのみが仕事なるふねの中にも時の少き。

ただいねて天下の美味の選ぶままに與へらるれどこころたらはず。（昭和八・四・二三）

朝まだき船の動きの甚し低氣壓の後を追ひてゆくらし。

みしりみしり胴ふるはせて吾が船はさかまく波をわけて進めり。

波たてる大海原に波たてていさみ躍つて吾が船は往く。

荒波とたたかひてをる船の中に静に煙草くゆらしてあり。

ゆるぎはしる船のデッキを股ひらきよいよいのごとしてあるくかな。

（昭和八・四・二四）

あさまだきふと眼さむればしけやみてふねは静に走りをるかな。（昭和八・四・二五）

白波の中に白波おこしつつ船は走れり願のままに。

ひゆうひゆうと船になる風どうどうと船をうつ波さかんなるかな。

船まどに鐵盤あてて荒波をむかふそなへのととのへるかな。

吾が力たのめる船は低氣壓を恐れもなさでつき進むかな。

風にふかれ波にうたれて吾が船はみちりみちりと力こめゆく。

晝くらくくもれる海の見ゆるかぎりただ一ひらに白波たてり。

大雪に送られてたちし外國の旅のをはりにこのしけもよし。

のるふねの力たのめば荒波に船の動けどあやぶげもなし。

荒波のうたをよまんともくねんと上甲板に煙草くゆらす。

船になれかかるしけにもへやをいでよちよちしつつ食堂にゆく。

天地のゆるぐがごとき大波をものともせずに進むふねかな。

波いかに狂ふもあすは日の本につくをうたがはずふねをたのめば。

このしけは海の女神のお別れを惜しむうれひの血のとどろきか。

すぐる八日言葉らしき言葉一つだに云はでくらせり啞のごとくに。

船の中に多くの人と共にゐてもただ一人ともこころ語らず。

見えぬために人に近より語り得ず人亦吾によりて語らず。

獨りあるき獨りこしかけ獨りいね一切衆生と共にあるけり。

一生を言葉らしき言葉の一つだにかたらでをはる人もあらんか。

默々と語らんとせず働けるトラピストの人の力をしおもふ。

命がけに教乞ひたき人あらず吾に教を乞ふ人もなし。

默りゐてすまばいつまでもだまりゐて念佛相續にはげみまをさん。

うたによむにはづかしきことも思はるるその思ひみてあきれをるかな。

かざるために敢てかくすといふにあらずあまり恥かしき儘に秘めおく。

おのづからに知られてもよしと思ふ事をはぢてひむるは苦しからざり。

人の世のひろさをおもふ吾がむねに現はれきたる影をうちみて。

吾は我が國にかへるを思ほへばただにうれしくむねのとどろく。

むかへらるる人はたれたれとその顏を思ひみるだに心ほのめく。

人まちて人とあはざる船旅に面壁九年の達磨をしのぶ。

勿體なく坐禪の時のめぐまれぬ船の八日の靜かなる日の。

ながき旅にうけしめぐみの數々をまとむるによき船の旅かな。

日數へし旅のたまものをまとめみればわが憍慢にあつきみめぐみ。

波狂ひむねはあれても動きなき靜けきこころめぐまれてあり。

めぐまれの多きが中に尊きは獨り靜かに住みうる力。

人にあへばすぐにむかむかつきかかるくせもつ人のあはれなるかな。

くもりをれどけふの日暮のいさましきあすは日本の地をふまましと。

船ゐひにいねてゐながらうたがわくあすのかへりのうれしきためか。

こころだに狂はであれば怪我はなし心狂はば命あやふし。（昭和八・四・二六）

三。ハワイ小唄

ハワイよいとこ
熱さを知らず
何時も涼しい
風がふく。

ハワイよいとこ
寒さを知らず
何時もまつかな
花が咲く。

人を待ち待ち
ハイビスカスの垣に
たてば小犬が
ざれかかる。

口笛ふいて
あの人らしい
椰子の樹の間に
月が照る。

椰子の樹蔭の
芝生に二人
潮ふくんだ

風あぶる。

ダイヤモンドの
岬をめぐる
戀の影法師
海の月。

ハワイ女は
火山の女神
好きな男を
燒きこがす。（昭和八・二・一四）

ヒロはよいとこ

日ごとにふれど
あつい陽影が
をがまれる。（昭和八・二・一八）

どこへ行つても
ハワイの島は
あまいお砂糖の
風が吹く。

辛い浮世が
おいやとあれば
砂糖のハワイに
おいでませ。

岸の岩角
うつ波きいて
遠い故郷の
人戀ふる。（昭和八・三・二五）

黍の葉かげで
をりをり泣いた
くやし涙が
まだ冷えぬ。

ゴーヘーゴーヘーと
追ひたてられた

昔おもへば
身がよだつ。（昭和八・三・三〇）

淺間丸にて

あれの一日を
キャビンにこもり
うたの花草
つみまはる。

さあさゆきませう
小唄の國に
愛のかをりの
あと追ひて。

たたきやいつでも
戸の開かるる
愛の家もつ
ふるさとに。

とぢたまなこに
ちらつくかげは
こがれまつ子の
たまゆらか。

戀ひしい聲で
よびおこされて

きめりや船べり
波の音。

海の女神の
ねたみのあれか
それもうれしい
愛の旅。

なにをそんなに
泣くかときけば
戀とこたふる
子のかはい。

泣くよなつらい
戀路をゆけば
人と生れた
甲斐がある。

いやならおかんせ
しひてと云はぬ
わしにやすぐれた
親がある。

愛に心の
足らへる吾の
前をかすむる

かげはない。

ひとりロージ
たばこをすへば
愛の女神が
よつてくる。

くにがあるぞへ
常世のくにが
花とうたとの
國がある。

戀に身をふる

娘のやうに
船は身をふり
波をゆく。（昭和八・四・二四）

寢臺に別るる歌

今宵かぎりの
わかれとおもや
ここな寢臺に
氣がのこる。

すぎし九日
抱いたそちと
わかれ惜しのて

何とせう。

しけの夕ぐれ
なぎたるあした
かたりあうたは
そちばかり。

親にも子にも
つまにもかはり
いつもわしをば
だきよせた。

ゐうてくるしい

からだもそちに
なげていつしか
まどろんだ。

人とかたらぬ
さびしいむねに
念佛したのも
そちのそば。

波の音ききき
静かなこころ
うたによんだも
そちのそば。

わしのしぐさの
すべてをしつて
だいてくれたは
そちばかり。

知つてをりやこそ
なさけもふかい
それで別れが
なほつらい。

あすは故國の
吾家にかへる

わしもそちには
氣がのこる。

そつとこぼした
なみだのしづく
そちは身にしめ
くれたぞへ。

人にきかれて
はづかしやうな
ひとりがたりを
そちやきいた。

何をしつても
きいてもそちは
いつもすなほに
わしだいた。

今度わかれりや
またあふ縁が
またとあるまい
ういわかれ。

あすはいづこの
旅する人の
さびしいむねを

さするやら。

誰といねよが
おまへの骨にや
わしのぬくみが
しんでゐる。

そちのからだで
旅する人に
わしのぬくみを
わけてたべ。

いよよ今宵は

最後のむつみ
いつそしんみり
ねむりませう。（昭和八・四・二六）

昭和四年ハワイ紀行

一。神戸からホノルルまで

四月十日。九時頃に森具の松本家を出て神戸海岸通の後藤旅館に行く。松本順吉氏夫妻とお嫁さんとが一緒に來て下さつた。宿に着くと、武雄と眞田君と平松みさを子とが來て居た。眞田君の松任町の町會議員の選擧には三票だけあつた。そして平松子が應援演說をした爲めに小學校教師の職を去らねばならぬやうになつたといふ事を聞いた。平松子の應援演說は、ちと輕はずみだつたと思うた。併しこれを教訓としてまちがひなく自分の道を進むやうにと語つた。京都から猪山君が來た。大阪から信耕・中島・今川・崎本等の諸君が來た。神戸の栗原君等が來た。尼崎の波多君も見えた。賑やかに送られて天洋丸に乘つた。總は横濱まで同船することにした。五色のテイプの

風に飜るのに別離の哀愁をまざらしながら皆に別れを告げた。室はCデッキの百十號である。フレスノに居る同窓生水戸憲道君の細君が子供を連れて再渡航をするのが同船すると挨拶に來た。船が出てから室内の荷物の整理などして居るうちに日暮になつた。大抵の御客は皆神戸で上陸したので、食堂は靜かであつた。活動を續けて來た疲勞が一緒になつて來た。それに昨夜風邪を引いたので頭が重い。でも、湯に入つて安らかに夢を結んだ。

十一日。午前九時頃横濱に着いた。チト早く着いたので迎への人が見えない。其の間讀書室で『中國民報』に出た講演速記に訂正を加へた。それが終つた所へ東京から武内輝次君が來た。大橋介二郎君が來た。携へて東京に向うた。帝國大學の圖書館に姉崎正治氏を訪ね、米國に行つて會ふべき適當な人を敎へて貰うた。叮嚀に敎へて呉れられ、二三氏への紹介狀をも書いて呉れられることになつた。それから大橋君の家に行つた。鹿野久恒君と小山禮三郎君とが來て居た。今津文三郎君が來た。松谷後室が今立老人を伴うて來た。夜になつて益守君が青木須磨子と共に來た。熱があるので藥を飲んで早く寢た。

十二日。朝早く江渡幸三郎君が來た。中村金藏君が來た。岡本桂次郎氏が來た。みんなで記念の撮影をした。やがて横濱に着く。今朝受けた電報に從ひ、大谷派別院に立寄る。輪番出雲路宏君が昨日船に迎へに來て私を見失うて了うた。昨夜有志の會を開く積りであつたがそれが駄目になつたので今日午餐會を開く積りだつたといふ。併し、船に見送りに來る人があるからといふので簡單に皆で中飯を頂き直に船に行つた。雨が降り出した。船へは小山・武内・中村・末吉・木村夫妻・暉峻・角・鳥越・永野等の諸君が見えた。甲板で記念撮影をした。雨が降るのでテイプが直に破れた。最後の銅鑼に驚いて總はおどおどして船を下りて行つた。船が暫く動き出すともう誰も見えない自分を悲しく思うた。春雨のそぼ降る中を船は三時に出帆した。二人の室に一人居るやうになつて居たので嬉しかつた。疲れもあるし熱もあるしするから船の十日をゆつく

り靜養することに心をきめた。港外に出る頃から波が大分大きくなつた。併し靜かに寢て居るには何等の差支もなかつた。船中の靜養の傍ら先日汽車中で文部省の音樂協會の主事伊藤精次氏から託された佛敎唱歌を試作してみようと思うた。

せめてもの思ひをつなぐ五色のテイプに雨のむごく降りけり。

わぎも子は最後の銅鑼に驚きておろおろ船を下りて行きけり。

十三日。雨。ひねもす床にあり。午後醫室に行つて咽喉に藥を塗つて貰ふ。夕飯の食卓にも出ず、藥を飲んで靜養した。

夜も晝も獨りキャビンに寢てあれば自ら念佛湧き出づるかな。

獨り居のキャビンゆたかに別れ來し懷しき人を戀わたるかな。

十四日。晴。朝から寢て居た。夕方床を出て船中を散歩した。雨がしぶしぶ降り出した。

大洋にふさはぬしぶしぶ雨が降り旅の心のうるほへるかな。

佛の讃仰の歌を案じた。

○

かがやく日にも
冴ゆる月にも
とざせる胸の

今日は開けぬ
み光りたふと
嬉しみほとけ。

○

まつかなまるい
朝日の中から
黒い烏が
飛んで出て
夜が明けたるぞ
戸をあけよと
聲高らかに
鳴きまはる。

○

天地を
つらぬく
おほみ力の
我に下れり
足なへの
腰はたちたり
いざ行かむ
望みのままに
海山越えて
あなたふと
みほとけの
みをしへ
あなかしこ。

○

陸地といつたら
小島の影さへ見えぬ
太平洋の眞中を
我が大船は
東へ東へすぐに走る
疑ひなしにだ
信じぬいてだ
空には日が照る
星が出る。

○

二度目に日本を離れて
外國への旅に出た

此前の時ほど感じが深くない
その筈だ
あれからわしは
いつも日本を越えて
日本を見て居たのだつた。

○

數多き見送りの中にうつむいて
わしを見なんだあの人ばかり。

○

惠まれの我れにしあれば我が乘れる海の行手に禍あらじ。

○

此儘わしが死んだなら
泣いて送つた人達は

どうすることかと考へた
しばしはいたく泣くだらう
そのうちにみんなそれぞれに
自らの道を行くだらう
さうしてみんなも死ぬるのだ。

わしが目が悪いからというて頼んでおいたら何くれと食卓のウエーターが教へて呉れる。これはこれで、これは此のナイフでと叮嚀に教へて呉れる。あなたはアスパラカスを知つて居るかといふから、うんそれをといふと、持つて來て食べ方を教へて呉れる。なまじつか知つたふりをするよりも知らぬ顔し萬事習うて居た方がおだやかで平安だ。

とつ國の幼な子の母にあまへ居る聲に聞きほるる隣の部屋の。

十五日。雨しぶしぶ降る。心地よく床を出て食堂に行く。食後デッキの椅子に寢て海を見る。

朝飯を終へてデッキの長椅子に寢轉びながら海を見るかな。

椅子に寢る頰にシブキの觸れてよき太平洋の春の雨かな。

家へ電信を打つ。

春雨
ぬくし
海は
平らに。

『中外日報』へ電信を打つ。

春雨や太平洋の波静か。

○

ペンキ塗り船の中なるペンキ塗り終日ペンキ塗りて暮せり。

○

天地のめぐみになれし獨り子はあつき惠みに常にたらへり。

○

なにとはなしに
ただ惚れ惚れと
み光りの
仰がれまつる

なにとはなしに
ただ惚れ惚れと
み力にたよられまつる
なにとはなしに
ただ惚れ惚れと
み惠みになごまれまつる
なにとはなしに
ただ惚れ惚れと
みほとけの偲ばれまつる。

○

獨りは淋し
されど靜かだ
獨りは淋し

されど冴やかだ。
獨りは淋し
されどゆたかだ。

○

子を連れし若き女の折々に我が室に來て道を問ひけり。

○

獨り居て人戀ひ居れば何事の障りもあらで心くつろぐ。

十六日。晴。

惠みは
深し
海は

なぎたり。

うなばら
はるか
ひろい
あを空。

うなばら
はるに
なごむ
すこやか。

風通りよき甲板に美しくしつらへる大食堂、丸形、角形、八角形、形いろいろの食

卓が白いクロースに電燈まばゆく光る。黒衣のシチュアート、白衣のウェーターに案内せられて椅子につく各國人、男は總て洋服、女も殆ど洋裝、赤・青・白・縞、とりどりの洋裝の間に友禪の振袖姿もきは立つ。ピアノとバイオリンの樂につれて料理が配られる。卓にはアネモネ、チウリップ、アマリリース、マーガレット、シネラリア、スキートピーなど、中にきはだつ白百合の花、白磁の皿、銀のナイフ、フォーク、スプーンの大小とりどり。美しく印刷されたメニューを見ると海山の珍味が記されてある。牛、豚、羊、山羊などは平凡、チキン、ダック、ピジョン、グース、水鳥、はては七面鳥。野菜はセロリ、アスパラカス、キャベヂ、豌豆、赤かぶら。果物には西瓜、メロン、パパイヤ、マンゴ、林檎、トマトウ、オリーブ、なつめ、くるみ、オレンヂ、ボンタン。菓子の色々、珈琲、ココア、紅茶に番茶。その外、各國の酒の色々、人々は好みに任せてひた食ひに食ふ。この室に入る毎に、まばゆい氣がする、目まぐるしい氣がする。此の下の下の蒸し暑い三等室には、支那人、ロシヤ人、ヒリッピン人、日本人も數多い。彼等の食事は何々ぞ、斯う思ふときさ、我何の譯あつてか此食堂に入るを得るぞと疑ひなきを得ないのだ。船は社會の縮圖だ。パノラマだ。さすれば、社會は厭な處だ。船の改造、社會の改造、どうかモッと平等にならなければいけないのだ。

○

ある方への電信。

船十日太平洋のうす霞、海うらら西半球に船は入る。

○

生くるすべなき
この命
み敎により
よみがへる
よみにおちゆく
このいのち
みをしへにより

かがやけり
いざみそなはせ
この命
み胸のままに
召したまへ
とこ世に生きし
このいのち
千萬代の人に
まゐらせん。

一

十七日。晴。午前十時、甲板にて遭難時の乗客の取るべき動作に就いての豫習があつた。人々は救命器をからだに附けて定まりのデッキに集まるのだ。

みほとけに召されてここに
つどひたる我がはらからに
やはらぎあれよ。

二

みほとけに召されてここに
つどひたる我がはらからに
救ひあれよ。

三

みほとけに召されてここに
つどひたる我がはらからに
くつろぎあれよ。

四

みほとけに召されてここに

つどひたる我がはらからに
つつしみあれよ。

五

みほとけに召されてここに
つどひたる我がはらからに
よろこびあれよ。

六

みほとけに召されてここに
つどひたる我がはらからに
かがやきあれよ。

○

みちりみちり船底の軋む音にさへ馴れてのどけき夢に入りけり。

○

一

みほとけの
えにしによりて
はらからここに
名乗りあひけり。

二

血の通ふ
はらからよりも
みたまの通ふ
深きかたらひ。

三

うつろはぬ
命に解けて

日かずも知らに
睦みあひしに。

四

うら悲し
今日のお別れ
しばしの別れ
いざやおさらば。

五

世のきはみ
時のいやはて
つきざる契り
ねぎておさらば。

○

日の本の名殘とどむる生け花のしをれて悲し船路遙けく。

萎れたる花見れば悲しさりながら捨てるにたへず其儘におく。

十七日。晴。今日は同じ日の重なる日である。横濱からアメリカに行く途中に一日、日が重なることになるのだ。昨夜十一時頃百八十度の線を越えたのだといふ。夜もすがら眠れず。朝より靴磨きの戸をあくるに波の音雨の音聞ゆ。歌が出來た。

一

みほとけのあまき口づけ
南無阿彌陀佛。

二

み名稱へ心とろけて

みぬちぬくもる。

三

み力の我に下りて
胸うちをどる。

四

勇みたちみ胸のままに
道に進まん。

五

あなたふとみあしのもとに
南無阿彌陀佛。

○

日本へ數百里アメリカへ數百里。
太平洋のまん中に唯一つの此の船。

乘組員二百餘り乘客が四百人、
都合六百餘の人が居る、
丁度小さい村のやうだ。
獨身者は多いが夫婦者もあり、
子供を二三人持つた者もある、
世間離れをしたやうで、
却つて世間の事はすべてある。
階級の區別がひときは目立つ、
船長室には蘭の盆栽が香ひ、
船員の寢臺は油臭い、
一等客と三等客とは
殆ど顏を見合すことはない。
室や食卓が別なのは勿論、

散歩するところさへ別なのだ。
一等に居るわしは何だか氣持がよくない、
三等のお客は尙さらだらう。
厭な感じがする。
デッキゴルフ輪投げ、
マージャン碁將棋、
酒場もあればバクチ場もある、
甘い戀もあり苦い惡みもある、
すべてがきはどくすべてが露骨だ、
しかしまかりちがへば、
共に死すべき運命を持つので、
すべてに通うたくつろぎがある。
活動もあれば芝居もあり

讀む人もあれば書く人もある、
等級のちがひはただ金にある、
金のある者が自由を持つて居るのだ、
金のない者は人間扱ひをされない、
ここに現世相がよく見える、
ここもやつぱり世の中だ。
一等室にゆつたりと
自分だけの幸福を誇つては居れぬ、
みんなが一等客になる時を來たさねばならない。
金でも德でも
共に進むやうな世が欲しい。

○

昨日も海

今日も海
單調らしいが
さうでない。
一日波の形が變り
刻々雲の姿が移る。
いつも新しい景色を見
驚きの目をみはる。
行き行きて水ばかりな海原
それでも日毎珍らしい
變化になれた人の子は
變化がなけにや滿たないのだ。
變化は人の命の流れなのだ。
○

やすらひの夜のまくが落ち、
働きの晝の舞臺があいた、
戸毎に鳴く鳥
み寺の鐘の音
森に烏
庭に雀
ほのぼの朝日
東に出でた。
天地ををろがみ、
み佛のみ名よび、
靜かにしばし
おのれを思ふ。
み教仰ぎ

みむねたふとみ、
心さやかに
今日のひと日を、
勇ましく
なごやかに
すぐさまほしき。
み光り清く
海路照らして、
心あかるく
今日のひと日を、
み手添へて
正しきに
導きたまへ。

十八日。晴。先度から毎日思うて居た三歸の歌が出來た。

あめつちに
みつるみたまに
かしこみまをす。

ナモーブッドハー
はらから
手を取り
身に道を
さとりあかし
世をすくはんと

願ひまつる。

ナモードハルマ
はらから
手を取り
みをしへを
深くきはめ
智慧廣かれと
願ひまつる。

ナモーサンギヤ
はらから
手を取り

大衆を
すべ整へ
さはりなかれと
願ひまつる。

三歸の歌は久しい前から考へて居たのであつたが、漸く出來上がつた。『華嚴經』の三歸の文をやはらげたのだ。比較的によく出來たやうな氣がする。嬉しい日だ。

○

甲板にどよめきが起つた。
サイベリヤ丸サイベリヤ丸、
あちこちに叫びがあがつた。
あわててキャビンに行つて
双眼鏡を取つて來た。

三本マストの白い船が
青い海に白い波をたてて
勢ひよく走つて來る。
黑い煙が長く流れて居る。
しばしのうちに船は近づいた。
左のかたを行き過ぎる折には
甲板の人の顏が見える。
日本を出てから八日間、
陸も見ず船も見ず、
ただ海ばかりを見て來たのだ。
わしらはサイベリヤ丸を見て
いひ知れぬ嬉しさを感じた。
サイベリヤ丸でもさうらしい。

こちらの甲板に叫びがあがり、
あちらの甲板でも叫びがあがる。
白いハンケチを振る者もある。
船に居るとすべてが感傷的になる。
近づいたら抱きつき度い氣がする。
國に居たら顏をそむけて通るやうな間でも、
此の大洋の中ではすがりつき度い。
我等はちがうた形の我に會ひ度いのだ。
一人は多人を戀ふのだ。
やはり人は孤獨には堪へぬのだ。
束の間に船は通り過ぎた。
名殘惜しさうに見送るのは
わしばかりではなかつた。

船が遠く遠く行つた。
船體が見えなくなつて
黑い煙が殘るばかりになつた。
それでもみんなが甲板に立つて居る、
親しい人の柩でも見送るやうに。
日本を出て行く人、
日本に歸り行く人、
出る者は活動を、
ある者は活動の準備を、
歸る者は休養を、
あるはまさに活動に、
心の向きはちがふけれど、
海洋を旅する者の心は緊張して居る。

だから感傷的にもなるのだ。
サイベリヤ丸は見えなくなつた。
わしはぢつとこんな事を考へてデッキに立つて居た。

○

珍らしく船にあひければ船の中の人喜びにどよめけるかな。

十九日。晴。午前十一時乘組員一同記念撮影があつた。ホノルルの玉代勢君からウエルカムの電信が來た。心が勇んだ。

蘭の香や船長室に海の風。

船長室にて或人の繪に贊す

菜畑を耕しつかれ畦にいこひひさごかたむく太平の民。

○

夕暮の川添ひ道をかへり來れば村のお寺の鐘の聞ゆる。

二。ハワイ

二十日。晴。今日が愈〳〵ホノルルに着くかと思ふと嬉しくて朝早くから眼がさめた。荷物の整理などすべて整へて了つた。人がして呉れれば何でもして貰ふわたしも、愈〳〵獨りとなればどうにかかうにかやつて行く。こんな忙しい時になると賴んでおいたボーイさんも役に立たぬ。ただ自分でやるだけだ。九時頃にホノルル灣頭に船が着いた。船中でパスポートの檢査や身體檢査が形式的にざつと行はれ、船が棧橋に着いた頃はもう十時を過ぎて居た。船の中で親しみ合うた人達に名殘が惜しまれた。ふと船室に玉代勢君の姿が見えた。携へた香の高い花輪をわしの首にかけて呉れた時は愈〳〵ホノルルに來たのだといふ喜びを確にした。日布時事社、ハワイ報知社の寫眞班が甲板で寫眞を撮つて呉れた。喫煙室で記者に語つた。此船でハワイに上陸した人に、ペルーに赴任する栗栖公使や横濱正金の取締の水津氏なども居たので訪問の新聞記者が忙しさ

うだつた。やがて船から下りて税關の處に出た。五六の人が又首輪をかけて呉れた。税關の前には男女多くの人が迎へに來て居る。ちよつとそこまで出てみんなに挨拶すると、みんなから首も廻らぬやうに色々の花輪をかけて呉れる。えも知れぬ喜びを感じた。初めて來る處だのにこんなにして迎へて呉れるのは過分のもてなしだと思うた。成るべく荷物を少くしようと思うて居たのに、色々のことづかり物もあつて、大貨物十二個、トランク等十個、是等の一々を開いて税關で改めて貰はねばならぬ。しつかりしてある荷物ほど面倒だ。ことづかり物などは何があるのか分らぬので税關吏に見て貰ふ外はない。四五人の方が汗みどろになつて手傳つて下さつた。大崎・寺田・長岡等の諸君が殊にあちこちして呉れられた。京都からことづかつて來た佛具佛壇の箱にのみ關税を取られた。こんな物にも三割三分の關税ださうだ。あてがひに一箱百圓の價格だというたら、一箱に參拾參圓位の税金を取られた。こまかいやうでも税關はざつぱなものだ。税關なしに世界中が通れるやうな世界にしたいものだ。税關手續が終つてから、玉代勢君が新調して待つて居た自動車に乘せて貰つてキング通りの大谷派

の別院に着いたのは正午過ぎであつた。氣候は内地の六月頃のやうな暖かさである。町は低い家が多く、椰子、ビンロウ樹、マンゴ、榕樹などがあるので、初めてシンガポールに上陸した時のやうな感じを受けた。日本人が多く通つて居るので外國に來たやうな氣がしなかつた。別院は五間に十間位の二階建の木造建築で、二階が本堂になり、下が庫裡に用ひられて居る。門を入る處に大きな石燈籠があるのは珍らしい。一月まで深奥君が監督としてここにあつたが歸國し、今は玉代勢君がそれに代つて寺務をとつて居るのだ。わたしは北向きの二室をあてがはれた。河崎君も先年此處に宿つて居たと聞く。晝飯後玉代勢君に導かれ先づ兩邦字新聞社を訪れ、それから西本願寺、日蓮宗、曹洞宗、淨土宗、眞言宗の各別院に參詣し、西本願寺の今村惠猛氏、日蓮宗の末藤辨孝氏、淨土宗の福田闡正氏、眞言宗の曾我部了曉氏に會うた。曹洞宗の監督の駒形善敎氏は病中で會へなかつた。西本願寺の別院は最も豪壯な建物が建つて居て佛敎の寺院というてもよいやうだが、他のすべては建築としては粗末なもんだ。今村氏が三十年の苦勞の結晶には他の各宗の何れもが及ばないやうだ。ハワイ全島に於ける各宗の現況を昭和二年の統計によつて其の概要を記せば次の通りである。

	寺院	敎場	敎師	信徒數
西本願寺	七〇	四二	二五〇〇〇	
日蓮宗	二	二	五八〇	
曹洞宗	八	九	二六七〇	
淨土宗	一六	一七	八三五〇	
眞言宗	二七	二七	三〇〇〇	
東本願寺	六	五	二八五〇	

布敎に着手した年代は次のやうである。

西本願寺	一八九七
日蓮宗	一九一七
曹洞宗	一九〇〇
淨土宗	一八九四

眞言宗

東本願寺

之れによつて見ると、淨土宗が最も古く、次が西本願寺である。日本に於ける宗派の背景もあるが、開教後の年代も宗旨の繁盛に影響して居る。西本願寺の今日の大を來たしたのは確に今村氏の功勞があつたのである。實際に於ける精神的教導の內容に至つてはわたしにはまだ明かになつてゐない。全島を廻つた後に何か纏まつた考が湧くだらう。西本願寺の方では、近頃英語傳道を始めたといふ。其の教師のハントといふ人にも會うた。夕飯を大崎氏に導かれてアレワハイトの春潮樓にて日本料理を頂いた。玉代勢君と三人でくつろいだ氣を味うた。土瓶に入れて日本酒がつがれた。ハワイ製だといふが灘の銘酒に劣らぬものだ。禁酒國に這入つた第一夜に此の日本酒を頂いたのも面白い。夜、大谷派別院に於て歡迎會が開かれ、男女八十人ばかりの人が集まつた。其の多くは別院の信徒である。玉代勢君の開會の辭があり、大崎氏の歡迎の辭があり、わたしの挨拶の後、一同が交々自己紹介をした。熊本縣と廣島縣の人が多かつた。卓上には果物と色々の色をしたソーダ水が配られてあつた。清洒たる會であつた。會費は米貨五十仙ださうだ。日本の壹圓貳拾錢位に當るのだから物價の程度が察せられる。ホノルルに着いて直ぐ稅關の赤帽に、玉代勢君が拾壹弗卽ち日本の貳拾五圓ばかり拂つたのをみて一寸驚いた。二時間ばかり働いて一人でこれだけ儲かるのだ。總てがかうとはいくまいが、よい金儲けのある國だと思うた。歡迎會の席上でも人達が多く笑ふ。のんびりした氣が漲つて居る。一年中氣候がよいので、人達は太平になつてゐるらしい。春潮樓の女中が、わたしも子供二人持つて居りますがハワイはわたし共のやうな貧乏人が子供を育てるには結構な處ですといつて居た。男でも女でも着物の種類が要らぬのでなかなか助かるさうだ。玉代勢君がこちらへ來てからもう九年になる。こちらで二人の市民をまうけた。大正五年に那覇に行つた折に出來た男子に正敏といふ名をつけたのがもう十三歲になつて居る。年月は早く流れる。今日阜頭に會ふ筈の泉原寬海君はハワイ島の方で葬式が出來たといふので來なかつた。

二十一日。晴。午前は日曜學校の生徒に語つた。二三氏の來訪を受けた。午後は別院の婦人會の總會で講演をした。

手を合せ我を拜みて去り行きし人なつかしく思ひ居るかな。

高臺に車走らせ海沿ひの町のともしを眺めつるかな。

月照る
椰子の
村に
樂の音。

夜モイリリの大谷派の敎場で釋尊の降誕會と宗祖の御誕生會が開かれた。釋尊に就いて語る。此處には毛利典攬君が居る。細君が病氣で入院中だと聞く。敎場には二百人ばかりの人が集まり得るやうだ。

二十二日。晴。午前住友銀行支店に原田精市氏を訪ねた。丁度正金の福地支店長が水津氏を伴うて來られたのに會うた。大崎氏を訪ね、正午近くホノルル第一のホテル、ローヤルハワイヤンホテルに行く。各宗の監督今村・福田・駒形・曾我部・末藤の五氏と佛敎青年會の主事安井氏、副主事植田氏、玉代勢君と九人で會食した。此ホテルは海に面して立派な庭があつて、ゼネバの湖畔のロザンの何とかいふホテルを思ひ出した。歸りにワイキキ公園(カピオラニパーク)を巡り、有名な水族館を見る。青黃赤白黑、色々の色した珍奇な魚が泳いで居る。其側に公衆の海水浴場がある。戰勝記念プールの横を通り、日本人が御大典記念に建てた噴水塔などを横に見て歸つた。夜はモイリリの敎場で昨夜の續きの會が開かれた。

二十三日。晴。朝早く長岡時雨氏に導かれ、リアヒホーム病院を見舞つた。此處は官立の肺病院で、施療院である。此處に日本人が二百人ばかり居るといふ。立派な設備になつて居る。重病室を一々見舞ひ、後輕症患者に講話をした。夜、佛教青年會館で一般聽衆の爲めに講演した。植田副主事の開會の辭があり、玉代勢君の紹介の後、思想展開の黎明に就いて二時間餘り語つた。終つてから共產主義に就いて色々の議論があつた。武雄の同窓の松田氏に會うた。四高で三雄の友達であつたといふ中學校長龍溪玄深氏にも會うた。

二十四日。晴。午前中玉代勢君を勞して原稿を書いて貰うた。午後四時からハワイ中央學院を參觀した。ハワイで生れた日本人の子供は米國市民の權利を得るのである。彼等は米國政府の公立學校で學ばねばならぬ。日本人の親達は彼等に日本語を敎へる爲めに公立學校の放課後一時間づつ國語を敎ふる學校を建設して居る。それが全島に澤山建つて居る。今日參觀した處は敎師十七名、生徒千三百名といふ。上級生は中學校、高等女學校の上級生だ。上級生の男女二百名程の學生に對して日米親善の心を語つた。青年達は喜んで拍手して呉れた。夜二十五マイルを隔つた耕地ワヒアワに行く。青年會館で講話、西本願寺の管轄の下にある會館だ。此處に居らるる開敎使は日野義雄氏である。氏は今村夫人の弟であつて、足利淨圓氏の從弟であるといふ。月が美しかつた。青年會の青木君がわたしの著書を携へて同行した。

二十五日。晴。今日便を出さないと日本に行かないので、忙しい中を玉代勢君の勞を借りて此文を認めた。此文が日本に屆くのは五月の六日頃だらう。それが雜誌に載つて皆さんに見て頂くのは十五日過ぎだらうと思ふ。わたしは健在です。船の十日の間に風邪もよくなり、疲れもすつかりなほりました。こちらに來てからは相變らず忙しい日が續いて居ます。何處に行つても可愛がつて頂けるのは嬉しい事です。遙かに皆さんの健康を念じて居ます。今ハワイ島から泉原君がホノルルに着いたといふ電話があつた。もう木曜午餐會に行く時間が迫つて來たから、今度はこれで筆を擱きます。

四月二十五日　ホノルル大谷派別院にて

泉原君を小林旅館に誘ひ出してヌアタ國際青年會に於ける木曜午餐會に行つた。ハワイ大學の原田教授始め在留邦人の知識階級の人々が二十五六人ばかり居た。玉代勢君が司會者として挨拶し、わたしが來米の意志を語り、勝沼・原田兩氏の談話あり、一時十分に閉會した。御馳走は勝手に會員がカフテリヤから取つて來るので會費は要らない。わたし達の分だけは會が支出するのださうな。毎木曜にかうした集まりがあると聞く。忙しい社會の交際には至極便利な集まりだと思うた。日本の都會にもかうした集まりが出來て居るだらうと考へた。それからビショプ博物館に行つて、古代ハワイの宗教藝術に關する見學をした。古いハワイの宗教的偶像には、ベルリンの民族博物館で見た西部アフリカ土人の偶像を思はしむる物があつた。南洋諸島の奇拔な偶像を見て、泉原君があなたが欲しいさうだというた。本當に欲しかつた。わたしは文明人の工藝よりも未開人の工藝の方が好きなのだ。どこかに大まかな所があつて面白い。ハワイの宗教藝術に關する書物を買うた。三時に三人で別院に歸つた。泉原君は日本に居るとは十歳位若うなつて居る。いつも常夏のハワイに居ると若やぐらしい。玉代勢君が郵便を出しに行くといふのでこれだけ書き足しておく。

四月二十五日午後三時

四月二十五日。晴。朝泉原君がハワイ島から出て來た。正午ヌアヌ國際青年會館に於ける木曜午餐會に出席した。幹事は安森幸太郎氏である。玉代勢君が司會者として挨拶をし、次でわたしが挨拶をし、獸醫勝沼富藏氏、ハワイ大學教授原田助氏等の小話があつた。副領事柴田市太郎氏等二十人ばかりの會合であつた。散會後博物館に行つてカナカ土人の昔の生活狀態を察することが出來た。南洋諸島の人々の宗教的偶像などに珍らしい物がある。それ等の研究に關する書物を買うた。歸つて間もなくワイパフ耕地に行つた。行程十六マイル。此處には砂糖工場の大きなのがある。西本願

寺の開教使原田義海氏に導かれて工場を參觀し、後支那料理屋で地方有志二十名ばかりの歡迎晩餐會が開かれた。終つてから、佛教青年會館で講話をした。今夜も月が美しかつた。別院に來て寢たのは十二時過ぎだつた。

二十六日。晴。朝の間に原稿を纏めて日本に行く船に托するやうに發送した。眞宗教會の龍口善海氏等と午餐を共にし、午後はカメハメハ一世卽ちハワイを統一した王樣の銅像を見る。舊王宮跡が今のハワイ縣廳になつて居る所を參觀した。そこで近頃日系市民として初めて副檢事になつたので有名な築山長松氏に會うた。丁度縣會が開かれて居るので、傍聽席に暫く休んだ。議事進行中であつたが、議員の辯論は極めて靜肅なものであつた。丁度ホノルル市長が出席して何か議員の質問に答へて居たが、それも靜かな態度であつた。議員には支那系の人が二人、葡國人系の人が一人居るさうだ。日系の人はまだ居ない。次期あたりから出るだらうといふ事である、縣廳へ入るにも議事堂へ入るにも、門衞も居らず、巡査も居らず、簡單なものだ。午後四時ハレヤカラ號に乘込んでハワイ島に向うた。泉原君が導いて呉れた。

二十七日。朝七時ハワイ島のヒロに着いた。澤山の人が迎へに出て居た。ヒロの東本願寺を獨りで建立にかかつた藤本龜太郎氏の自動車で新築の寺に入つた。假屋をかけるやら、裝飾をするやら、澤山の人が集まつて日本の寺の御遠忌でも勤めるやうな騒ぎだ。ヒロは雨の町といはれる程雨量が多いのださうな。今日も少しばかり降つたが、それでも稀な天氣だといふことである。ヒロ滯在中、宿に充てあつたドクトル吉村英二氏の家に行く、同氏は岐阜縣の出身で、曾我量深君の著述を愛讀して居る人だ。珍らしい蘭花が澤山咲いて居るのでこよなく嬉しかつた。ダリヤもバラも咲いてをる。日本のつつじも咲いてをる。白百合も香うて居る。花好きのわたしは花に迎へられて心が躍つた。夜新築の東本願寺で歡迎會があつた。來會者二百人餘と聞く。女同行が總がかりでこしらへた和洋折衷の料理が卓上を賑やかして居る。司會者として吉村氏の挨拶があり、泉原君がわたしの紹介をし、キリスト教の牧師樋口氏が來賓を

代表して歡迎の辭を述べた。後わたしが挨拶し、みんなの自己紹介があつた。廣島熊本の人が多い。集まつてをる人の中には各宗の各教使達も殆ど見えてゐた。終つてから吉村家に歸つて寢た。ヒロは島の町ではあるが、町も廣いし、アスファルトが敷いてあつて自動車が澤山往復して居る。金澤あたりとはモツト美しい町だ。

二十八日。晴。午後ヒロから九マイルを隔たるオーラアの劇場にて講話をした。西本願寺の佛教青年會の發起である。開教使竹島氏に會ふ。幹事大藤氏が開會の辭を述べた。二時半から東本願寺の婦人會で講話をした。夜は各宗聯合會の發起で、西本願寺の佛教青年會館で講話をした。開教使西浦常念氏が司會の勞をとつた。氏は石川縣小松の人と聞く。ハワイに來てから初めて同縣人に逢うた。

二十九日。晴。朝から藤本・町田・泉原等の諸氏と共に火山見物に出かけた。火山はキラウエアといひ、現にあそこここに煙を噴き出して居る。煙を噴いて居る地裂の間に立つと顏がほてる。硫黃を噴いて居る山も見に行つた。それから程遠からぬバードシングパークに行く。此處は森林であつて澤山の鳥が鳴いて居る幽邃の地である。イチヂク、桃などがある。丁度イチゴとほほづきが熟して居たので、採つて食べた。月見草も咲いて居る。

煙立つ地ひびりの横に彳みて心に燃ゆる火を顧る。

いちご摘みほほづきとりてもろ鳥の歌へる山に遊びけるかな。

ハワイ島にはマウナケヤといふ高山がある。一萬四千尺の高さで、我が富士山よりは高い。雪を頂いて居るのがかすかに見える。外にマウナロアといふ高山がある。是れ亦一萬尺といふ。キラウエア火山は四千尺といふ。頂上まで自動車で行ける道がついて居るのである。火山の麓の藤本氏の別邸で晝飯も夕飯も御辨當を食べた。此あた

りに出來るチシヤは特別に甘い。歸途マウンティンヴィユーの小學校で講話をした。校長武内氏は秋田縣の人と聞く。今日は父の祥月命日なので、朝早く本願寺に行つて泉原君と共に讀經し、父が好んだ筍の料理をこしらへて貰うて御辨當に入れて貰うた。こちらの筍は日本のハチクのやうな小さな物だ。

とつ國にたらちねの逝きし日を迎へ好みたまひし筍を捧ぐ。

三十日。晴。晝の内、町田友一氏の宅に在つて揮毫をした。夜はパパイコウの本願寺青年會で講話をした。夕飯は中野九一氏が饗應した。此處には西本願寺の開敎使佐藤味法氏が居らるる。學校長田中久八氏がいろいろ世話をやいて呉れられた。

五月一日。メーデーだが、何等の運動もない。此處ではレイデーというて居る。レイといふのは、花、木の實などでこしらへた首飾りである。ハワイに着いた時、又は立つ時に人たちが首にかけて呉れるのをレイといふ。小學校の子供達に一つ宛此レイを齎しめてレイの展覽會をやるので、五月一日をレイデーというて居る。午前中、淨土宗の明照院、眞言宗法眼寺、曹洞宗大正寺、本派本願寺と近頃建つた大神宮とを巡拜した。夜は十九マイル程隔たるプナパホア町に行つた。九マイル町から後は隨分惡い道だ。佛敎青年會の人達の發起で劇場で講話をした。日本人會長尾崎實吾君が司會をした。此日雨が少し降つた。

二日。午前東本願寺にて座談會を開く。午後椰子島に行き、レンボンフォールを見に行く。夜東本願寺にて歎異鈔第二節に就いて連續講話を始めた。

三日。晴。午前座談會、午後揮毫。

椰子島の椰子の木蔭に彳みて小舟漕ぎくるカナカ人見る。

アンモラの大木の下に房になるアンモラを見てみ佛を想ふ。

椰子並木續ける町を夕暮の風なつかしみ車走らす。

今日も亦日毎雨降るヒロの町ひねもす晴れし陽にあはざりき。

書くことに稍疲れたる四つさがり冷えしパパイヤに息をつぐかな。

いにしへのカナカの人の祀りたるカフナの像を貰ひたるかな。

ここも亦やまとの人の住む家か椰子のこずゑに鯉幟たつ。

中村宮藏氏からカフナの像や火山の石を貰うて嬉しい日だつた。

四日。晴。午前座談會、午後揮毫。夜歎異鈔第三講。講話後送別の茶話會が開かれた。出席者百人餘、米國國歌と君が代とを相次いで歌ふ。此處に來てから三十年もたつ人が米國國歌を歌へないのが居るのを見てあんまりだと思うた。

五日。晴。午前吉村家に在つて客を受く。午後東本願寺にて宗祖の御誕生會を行ふ。ヒロに於ける東本願寺の第一回の御誕生會である。此地の人々の胸に初めて聖人の御誕生ましませと念じつつ御勤めをした。泉原君のいふが儘に、色衣五條を着て正信偈三首引の導師をした。遠い異國でこんな事も行はれてをるのだ。後に講話をした。午後五時ハレヤカラ號にてヒロを立つた。多くの人達の見送りを受けた。レイに首の廻らぬのも嬉しいものだ。泉原君が同行して呉れられた。ヒロの八日間は廣島の泉原君の寺に居るやうな心持がした。人々は到る處に自分の世界をこしらへて住むのだ。

夜十二時マウイ島のラハイナ港に着く。ワイルクのドクトル東福寺子四郎、西本願寺の開教使本好祐章の二氏わざわざ遠くより迎へに來て呉れられた。ラハイナに居る

東福寺香ドクトルの家に立寄り、約三十マイルの道をドライブしてワイルクの東福寺氏の家に行き直に寢に就く。モウ二時近くだつた。

六日。晴。午前本好氏と開教使長尾利劍氏とに連れられ、パイヤのドクトル大畑誠一氏を訪ね、パインアップルの出來て居る高原を廻つた。

見晴の好き部屋に居て波の音に聞き惚れ居ればさりあへぬかな。

ふるさとの壽司のもてなしなつかしき異國の島にさすらふ我に。

午後、町田龜三郎氏に導かれイワオの溪を見る。切り立つたやうな山岳の聳え立つ間に溪流が白く流れて居る。耶馬溪の景色に勝るあるも劣るを思はなかつた。夜カフルイのハワイで講演をした。夕飯は各宗の開教使とレコード社主とを招いて東福寺氏

が宴を張られた。ホノルルから青木君がわざわざ來て呉れられた。

七日。晴。此島に在る本願寺の開教使の方々が、東福寺氏が日本に旅するのを送る爲めとわたしの歡迎とを兼ねて桑田ホテルで宴を張つた。ラハイナから迎へに來た更科開教使に導かれ、午後五時ラハイナに着く。東福寺香氏の宅で町の有志の晩餐會が開かれた。後西本願寺で講話をした。風が強く吹いた。十二時マウナケア號に乘つて出發した。ワイルクからラハイナへの道は景色のよい處だつた。海を距てて高さ一萬尺もあるといふハレヤカラ山を見つつ行くのであつた。

八日。晴。朝五時ホノルルに着く。玉代勢君に迎へられて別院に入る。晝飯は泉原君の宿小林ホテルの主人に招かれてよばれた。ヒロのドクトル三戸玄三氏等と卓を共にす。氏は一高時代に德風會でわたしの話を聞いたといふ。數藤斧三郎氏の事に就いて語り合つた。夕方マノア丘上にある住友銀行支店長原田精市氏の宅に行つた。氏は

急用あつて日本に歸つて不在で夫人が萬事世話をやかれた。支店員十八九名と食卓を共にし色々と語り合うた。樂しい會の一つだつた。終つて午後八時ワイアレアレ號にてカワイ島に向うた。たつて賴んで泉原君に同行して貰うた。

九日。晴。朝七時半カワイ島のアフキン港に着く。ワイメアから大館誓君久保田佐一郎氏等の五六人の人が來て居た。ソフヱのチップタップにて朝飯をしたため、三十六マイルをドライブして晝近くワイメアに着いた。此處の東本願寺は今の大館君で四代目といふ。隣耕地マカウエリの布教所と共に三十年以前に開いた處といふ。西本願寺より先に開いた寺といふのに、其後東本願寺は土井信曉氏がホノルルを開く迄此邊地にたて籠つてゐたのだ。これを以て西本願寺の今村氏の事業を思ふ時に、人の力の大なることを思はしめられる。此處の東本願寺に入ると、古い處だけに熱心の世話方が居る。寺に居ると間もなく多年此寺に力を添へて呉れるとの理由でマカウエリ耕地のボールドイン氏とケカハの砂糖工場のフアヱ氏とを訪うて禮をいうた。緒方富雄氏の家が宿に充てられて居た。夕方ワイメアホテルにて有志の歡迎會が開かれた。三十六名の出席者があつた。大館君が司會の勞をとつた。夜東本願寺で宗祖の御誕生會の講話をした。此處の西本願寺の開教使大江法爾氏はわたしの本を多く讀んで居るといふ。嬉しく語つた。曹洞宗、眞言宗の開教使の方も見えて居た。

十日。晴。午前大館君等五六人の人々とワイメア溪谷を見に行つた。コーケーの眺望はなかなか絶景である。横に聳ゆるオロケレ山は高さ四千尺あるといふ。海に面する山の端の公衆休憩場で御辨當を食べた。此山の道にまでアスファルトが敷きつめてある。

山の端のコワの枯れ枝に靜まりて我が車見る雉のありけり。

山の上の庵にうたげしみはるかす海のあなたのふるさと思ふ。

山の端の小川のへりに車下りてランチャナの花を手折りみるかな。

ランチャナの花はかはゆしランチャナは種々の色に咲いて珍らし。

いにしへのカナカの人の用ひたる石の器を貫ひつるかな。

夕方リフェに行く。ここの西本願寺開教使宮崎氏は不在。佛教青年會館にて歡迎晩餐會が開かれ、酒井教師とカワイ新報社長藤田氏とが色々世話して呉れられた。後、講演に移る。酒井氏開會の辭を述べ、泉原氏が紹介の勞を取り、後わたしが講演した。終つてからワイメアに歸つて寢た。今日リフェに行く途中、コロア町に土井賴助氏を訪うた、氏の長男勇君は本年二十五歳、コロンビア大學を卒業して有名なる畫家となつた。米國でも隨分有名になつてをる。勇君に會うて其の版畫など見せて貰つて感心した。フランスの最近流行の繪のやうに勇健な筆力で書く畫風なるは嬉しい。恐らく日系の米國人の第一に生んだ藝術家であらう。

十一日。朝の間に緒方しげよ子等に導かれ、バーキングサンドといふ砂山を見に行く。そこを歩くと、犬が吠えるやうな音がするといふので此の名があるのだ。歸つてから本願寺に行く。座談會が開かる。晝飯前に日本語學校で生徒に話をした。後西本願寺に參詣し、此島に出來る香木を貰うた。香川佐市氏山近峯三郎氏とからカナカの石器の珍らしい物を貰うた。土井勇君が今朝書いたというて面白い水彩畫を持つて來て呉れた。午後宗祖の誕生會が開かれた。大館君の挨拶の後に講話をした。六時ワイメア棧橋から貨物船カアラ號に便乘してホノルルに向うた。三日月が美しかつた。隣室のカナカの女からニイハウ島で出來る貝のレイを買うた。

十二日。晴。朝七時半にホノルルに着く。迎への人が見えないので泉原君の宿小林旅館に行つた。玉代勢君が今朝五時頃に迎へに出たら八時頃に船が着くといふので今棧橋に行つたら船が着いた後だつたというてやつて來た。暫く語つてわたしだけ玉代

勢君と別院に來た。日曜學校の生徒に語つた。午後二時別院に於ける宗祖の御誕生會に會うた、勤行後玉代勢君と泉原君が語つて後私が講話をした。夜、眞宗教會に行つて講話をした。眞宗教會は元は本派から分れたものではあるが、今日では本派にも大派にも關係のない獨立教會である。ホノルルだけでも五六百の信者があり、全島に信者が散在して居る。隨分健實な眞宗の信心を喜ぶ教會である。現住は廣島の龍口氏である。

十三日。葬式が澤山あつて玉代勢君は終日忙しかつた。本日島巡りをする豫定だつたが、それが爲に行けなくなつた。午前と午後の暇々に玉代勢君を勞して此稿を書いて貰うた。午後遲く揮毫をした。夕方から東方約九マイル隔たつたカネオへに行く。奇拔な山を兩方に見て行く峠の道はなかなか面白い。峠の絶頂に千七百九十五年に元のオアフ島の王が此處で戰ひに敗れ遂にカメハメハ第一世が全ハワイを統一するに至つた古戰場であるといふことを、山を削つた處に銅板に刻してある。此あたりは隨分風の强くあたる所といふ。今日も自動車が吹き飛ばされさうであつた。此の古戰場をヌアヌパリというてをる。ハワイ名所の一つである。道端の並木にグアバの實がなつて居た。大谷派說教場の世話方前川謙吉氏の宅で夕飯をよばれた。後、同說教所で宗祖誕生會の講話をした。此處の說教場は、泉原君がホノルルに居た頃前川氏等と力を合せて建築したものといふ。玉代勢君と同行したのである。初めてグアバの實を食べた。皮の方には乙な味がある。中はアケビのやうな味がする。サネが餘り小さくて澤山あるので盲腸炎になることを恐れて食はなかつた。ハワイに來て五ヶ所で宗祖の御誕生會の緣に會うた。それが爲めしばしば宗祖を偲ばしめて頂いた事を喜んでをる。明日、先月わたしの乘つて來た天洋丸が、ロスアンゼルスまで行つて日本に歸る途中ホノルルに寄港する。こちらで手にしたいろいろの品物を船に托して送る。此文も亦船に托して送る。わたしは至極健かである。二十二日の總の文は見た。十八日の春洋丸に多くの文の乘つて來るのを待つて居る。もう夜も更けて來たから、今度はこれにて筆を擱く。次便はサンフランシスコから送る。みんなの健在を念じます。

三。春洋丸にて

ホノルルから十八日出したたよりは、十七日までの日記をかき送つた、その中に同日できたうたをかきもらしたから、ここにかき送ることとする。

見はるかすパインアップルの高丘のあなたの海に赤く日のいる。

カナカ人の笑ひ晴れ晴れやしの木の林にもれし夕風すずし。

雪舟の繪に見るごとくそそりたつ山めづらしみあかず見るかな。

きび畑にほれほれうたをうたひつつ働く人をふしをがむかな。

（五月十三日　ホノルルにて）

ホノルルの別れの夕もてなしのふらふら躍涙して見る。

ホノルルの終りの夜更マッサージの供養をうけてくつろげるかな。

五月十八日。晴。けふはいよいよホノルルをたつ日になつた。午前玉代勢君に原稿をかいて貰ふ。十時半ハワイ大學にゆき、男女三十名ばかりの學生に講話す、原田教授通譯の勞をとらる。

歸途西野太吉君の宅により、中飯をよばる。同君は小川區の出身、明達寺の日曜學校に來れりときいてなつかし。十數年前密航して來りしが、大工をしてやや成功し妻帶して一人の子あり、母にこの樣子を語りくれといふをきいて胸ふさがる。一時歸り、荷をこしらへ來訪の人達と共に棧橋にゆき、四時春洋丸にのりこむ。玉代勢君をはじめ、龍口・安井・青木・今村夫人等三十餘人、頸にかけられたいろいろのレイに人のな

さけを味ふ。船室はB甲板第十七號を與へらる。けふまでこの室に知友荒川五郎氏あり、ホノルルに上陸せりと置手紙あり。正五時船は靜に棧橋を離れた。眼がわるければ、テイプも投げられず、淋しかつた。見送りの人々の見えずなると、ひとり船室にいりて靜に四週間のハワイのことを回想した。玉代勢君と泉原君には特に澤山の世話になつた。その他、未見の友人から種々のもてなしを受けたことを感謝に堪へぬ。

到る處で握手した人の掌の强かつたことによりて初代同胞の骨折を思うた。二代同胞の將來は大切である。果物では西瓜とオヒヤとパインアップルとパパイヤがうまかつた。マンゴは印度のよりはうまくなく、バナナは沖繩のよりはうまくない。オヒヤは口にあはず、野菜では火山のチシャがうまかつたことが覺えられてをる。胡瓜・茄子・大根・葱・南瓜何れもある。魚は脂肪が少くて私にはうまかつた。

總・武雄・すみゑの文を見る。家には何事もないがうれしい。四月の父上の命日に順回君が來て、父のすきだつた筍や豆腐の田樂のあつたことをきいてうれしかつた。すみゑの文の中の櫻草の花やヒヤシンスの花を見て、花園の上に胡蝶のやうに心が飛んでゆく。宣の成身するのはうれしい。

四。お別れの言葉

四月の二十日にハワイに上陸してから、もう四週間過ぎました。今日は豫定の如く春洋丸でアメリカ大陸に向うて出立します。四週間の間に、オアフ、ハワイ、マウイ、カワイの四島をざつと一巡して來ました。到る處で握手した人の手の痛い程固いのがハワイにおける私の受けた感じの最も强いものの一つである。今では、日本人は、中流以上の暮しをしてをるやうであるが、これまでに築き上げるには、所謂初代同胞の骨折がどんなにあつたかと察せられる。あのほれほれ節のいろいろの歌を聞くときに、私は暗涙にむせばぬことはなかつた。よく忍んでくれた、よく忍んでここに同胞の國を建設してくれたと感謝の思ひに堪へぬのである。ちやうど端午の頃で、到る處に鯉幟のたつてをるのを見ても、母國を離れた同胞の心持がよく察せられる。欲をいへば、いくらでも望みをいふことも出來るが、とにかく我が同胞はいたいたしい心を持つた

人たちである。私は到る處で本國にお金を送りなさるな、金をためて本國にかへることを思はずして、この國でいよいよ發展するやうに努力しなさいと勸めた。禁酒令が出て、却つて我が同胞の酒量がふえたらしいのを見て苦々しいことと思うた。かうした天候の惠まれた國にあつて酒を飲んでゐては、かのカナカの運命を追はねばならぬことを思うてほしい。私は、先年、沖繩縣に行つて、沖繩を救ふには先づ第一にかの泡盛に重税を課することだといつた。私は、絶對の禁酒論者ではないが、禁を犯す面白さに飲むやうな傾向のあるのをあさましく思うた。やはり、どこまでも、あのほれほれ節の生れた時代を忘れないで、ますます同胞が精進してほしいと切に念ずる。ハワイの家庭については、あまり詳しいことを知ることは出來なかつた。お寺はたくさんある割に佛教の精神が深くしみこんでゐないやうな氣がした。ハワイに佛教の擴まるのは、これからだと思うた。ハワイに二十年もをる人が、アメリカの國歌をまだ歌へないのを見て、あんまりだと思うた。二十年もこちらに傳道に來てをつて、一二人の異民族に道を傳へることの出來ないのもあんまりだと思うた私は、到る處で皆さんに大切にしていただいたのを思ふと、身にあまる仕合を感謝せずにはをられませぬ。日本は、今、思想の激流に襲はれてをります。私は、この中に棹して行かねばなりませぬ。皆さんは、どうぞこの常に身にふさへる氣候の中にあつて、御油斷なく自分の道に精進していただきたいと念じます。では、おさらば。

親愛なるハワイ、なつかしいパパイヤと西瓜、椰子、檳榔樹、かはいハイビスカス、うつくしいボーガンビリヤ、さらば、我が同胞諸君、おう、さらば。

千九百二十九年五月十八日

昭和八年ハワイ紀行

一。大洋丸から

今朝から初めて紺碧の空を見る日和になりました。夏らしい雲の峰が太陽のあちこちにそびえてをります。シャツは薄いメリヤスにかへたが、デッキを歩いてゐると暑いくらゐです。十日前に雪の中を長靴をはいて出てきたのに、もう此處は夏です。東京へ三千浬、ハワイに四百浬ぐらゐの處にをります。長い航海も、もう二晩になつた。明後日の朝はホノルルに着きます。一月三十一日午後三時横濱を出帆した折には晴れてをつたが、翌る日からは曇つてばかりゐて昨日から漸く日光に浴するやうになりました。甲板の庭園の丁子の花の匂へる室のライテングルームで此の報道を書かせます。

今度ハワイにくることは昨年の八月中旬にヒロの泉原寛海君からの手紙を貰うた時

から決つてゐたのだが、その內に確かな招待狀が來るのを待つてゐたので確かに決つたのは十一月の末であつた。それから旅行免狀の出願をするなど準備にとりかかつたのです。正しく縣廳にパスポートの下附を出願したのは一月の七日だつた。免狀の來たのは十七日であつた。

武雄は京都の親鸞聖人の御本廟へ參詣したり、廣島の泉原君の寺を訪ねたりして、名古屋で米國領事の認可をとるために二十四日に先發しました。

私は大正十五年の暮に日本を出て南支那・セイロン・印度・ゼルサレム・エジプト・全歐洲の旅をして昭和二年の七月に歸國し、昭和四年にはアメリカ・カナダに旅をし、昭和六年には北支那と滿洲に旅をした。今度の旅で日本國の外に出るのは四回になります。前三回ともに出發の前に京都の大谷の本廟においとまごひに參詣するのが例となつて居りましたので、今度もお暇乞にと思つて二十五日の夜行でたつて二十六日朝京都に着し、二時間程の間に大谷に參詣し、本願寺に參詣し、友人五六に會うて夕方歸宅した。すると、今日名古屋で米國領事の認可をとつてゐる筈の武雄から電話で本人が出頭してくれなければ認可してくれないからすぐ來てほしいと言つてきたので、雪の降る中を終列車で發つて二十七日の朝名古屋についた。昨日から成瀨君の助力を得て書類の英譯等につき準備をして待つてゐた武雄と共に雪の中を米國領事館に行つた。譯なく認可狀が與へられたので、すぐ名古屋を辭し、終列車で歸宅した。雪の爲に松任驛から北安田へ自動車が通はず、長靴をはいて雪の中をかへつた。松任の町は長靴を沒するほどに水がついてゐた處もあつた。武雄は名古屋からすぐに東京に向うたのである。

二十九日には母の祥月命日なので例によつて讀經をし、參詣者に壽司の饗應をした。今日は出發するといふので送別會にかねて酒をも饗應した。雪降で松任までも自動車が通はぬとのことだつたが、ただ一人の勇敢な運轉手が雪を冒して松任の驛まで運んでくれた。四時に發つ筈の汽車が五時すぎに松任に着いたのに乘りこんだ。吹雪の中を村人等が澤山送つて來て兵隊を送るやうに男女聲を合せて萬歲を叫んだ時には熱い涙が頰を傳うた。金澤にて下車、驛前の東洋軒にて休んで、金澤の方々と共に茶など

飲んだ。支那そばに酒もくまれた。かくて吹雪の中を七時十五分發の急行に乘りこんだ。高光・上野・木場・北方・鳥越・源・平井・湯淺・吉田・島崎等の諸君を始め數十名の人達が送つてくれられた。總・すみる・宣・爽が同行した。

途中雪の難にもあはず、三十日の午前七時に豫定通り上野驛についた。東京の友人の方々が迎へてくれられた。メーソン氏夫妻がその中に居られたのも殊に目立つた。直ちに青草舍に入つた。メーソン氏はここまで送つて帝國ホテルに歸られた。午前中武雄は郵船會社に行つて切符を買うて來た。私のは大洋丸の一等二百二十一號室、武雄のはツーリスト六十五號室である。私のは二百十五弗で千五拾圓、武雄のは百二十一弗で五百九拾圓であつた。等級がちがつて不便だと思つたが、十日間に五百圓ばかりもうかることだからと思つて武雄の切符に節約を加へた。午後は住友にて信用狀を組みなどした。午前から午後へかけて青草舍に朝鮮の岡本桂次郎さんをはじめ鳥越・石川・出雲路・小山・川井田等の澤山の方々が來て下さつた。戸畑の今川の母も遙々來てくれられた。

かねての招きに依つて六時半に帝國ホテルにメーソン氏を訪うた。總・武雄・すみる・宣・爽を同行した。七時から晩餐會が開かれた。井上哲次郎・高楠順次郎・下村壽一・筧克彥・鹽澤昌貞・紀平正美・今岡信一良・角田柳作・正宗白鳥・平石貞市・鹿野久恒・ベリー・ローラン等の內外の知名の人達が來て居られた。アメリカに出立するに際してアメリカの友人から日本のホテルで送別會をして貰うたので殊更うれしかつた。食卓では、筧さんと下村さんがお隣りだつたので、古神道と佛敎とについて色々の話が交された。最後にローラン・ベリー二氏の音樂があつて十時頃散會した。私のでゝ愉快であつた。

と總とは青草舍に、武雄等は神田の芝田屋に泊つた。今日末吉菊麿君に今度出來する梵鐘の鑄造のことに就いて確かに賴みを入れた。香取氏が病氣なので訪問を見合せた。

一月三十一日上野驛から電車で横濱櫻木町驛についたのは午前十時半頃だつた。直に大谷派の別院についた。輪番鹿野君の發起で送別の宴が開かれた。二時大洋丸に乘込んだが、東京から鳥越・島田・末吉・武內・石川その他多くの方々の見送りを受け、横濱からも澤山の人が見送られた。逗子から木戸秋夫人が郁子さんと共に出てきて下さ

つたのもうれしかつた。眞田・葛西二君は家の殘務を片づけて今朝到着し色々の事務的の世話を燒いてくれた。中村君がデッキで皆の撮影をしてくれられた。かくて大洋丸は三時に錨をあげた。今度は武雄が同行するので、テイプを持つてデッキに立つてゐても淋しい氣はしなかつた。

大洋丸の船長は富岡彌右衞門氏であり、朝倉慶友君の姻戚の方で萬事よろしくと賴んできたと鹿野君が告げてくれた。何となく力のそはる氣がした。

夕方は事務長竹内鍋四郎氏等の計ひにて武雄は私と同室するやうになつた。それに大阪山中商會の宮又一君が私の向ひの室に居らるるので、これまたよい便宜で食卓を共にとつてもらつた。かくて眼の不自由な私も佛天のお計ひにて種々の加護を得て旅行をつづけさして貰ひます。

夕方メーソン氏から長文の電報がきたので、すぐ返電した。その後毎日船にて歌が浮んだ。それから、今度梵鐘が出來したら、松任驛から家まで曳いて行く時に唄ふ歌の文句をもつくつた。別に記します。

船の中では毎夜活動寫眞があり、六日の夜は演劇會があつた。ニュースのラヂオは聞える。新聞は發行される。屋上庭園に小鳥の聲は聞える。萬事行屆いて天上界のやうな生活である。武雄は船に强いと見えてちつとも醉はぬ。室は同室だが食卓はちがふのである。しかしメニューを見るとあまりちがつてゐないやうだ。今度の航海は乘客が少く、一等日本人十一人、外人十人、ツーリスト日本人八人、外人十二人、三等日本人四十九人、外人三十三人、總計百二十三人である。乘組船員二百三十八人に比べると一人の客に二人がかりで世話して下さることになる。武雄は船が少しも休まぬで行くといふことに頻りに感心してゐる。カモメが横濱からずつと船に附いてきてゐるのにも頻りに感歎してゐる。五日に大阪の松本君からボンボヤジといふフランス語の電報がきたので負けぬ氣になつてメルシブクとフランス語の返電をして船中の一興とした。昨日ハワイの泉原君から電報が來たので、すぐ返電した。さうだつた。二月一日の日に宅の方から臺北の木下君の電報を轉電してきた。十月臺灣にきてほしいと招待の電信である。すぐに臺北に承諾の電信をうち、宅の方へは出立の際確定してき

た本年中の日程の變更を報じた。その後日程を書いた。それは別に記載する通りである。四月二十七日歸國以後の本年中の日程である。朝鮮・滿洲・北海道・樺太へは今年も行くことが出來ぬので殘念である。又ここまで來ながら日の都合が出來ぬので米本土に渡られぬのも殘念である。かうなると何時でも一年が千日もほしいと思ひ、身體が十も二十もほしいと思ふ。十一面觀音だの千手觀音だのといふのは、かうした欲望の象徵であらう。

ヒロの泉原君からの電報によると、ホノルルの方では、青年會の安井君だの玉代勢君が準備をして待つてゐるとのことだ。其他の諸君とも舊交を溫めることを樂んで居る。

今度の旅行についても御餞別の志を下さつた方が澤山あつた。餘りにつづけさまなので、やや心苦しい氣がします。出立の際御禮狀を差上げることの洩れた方もあらうと思ひます。改めてここに御禮を申上げます。

今夜はデッキですき燒會が催されました。私は鷄肉を頂きました。西洋婦人が日本服を着て嬉々として鍋をつついてゐる樣も珍らしいものです。

今日はめつきり夏になりました。もうチョッキをぬいだ人が澤山あります。故郷はまだ雪に埋もれて居るのだらうにと思ふと、隨分遠方に來たやうな氣がします。

昭和八年二月七日

今日もよく晴れてゐます。寒いと感じた風が涼しく感ぜらるるやうになりました。いよいよ明日上陸となると、船にも船中のお友達にもなつかしい氣がします。荷物の整理やら計算やら心忙しいものです。今晩の便に出す爲に、これにて筆を擱きます。日本から三千餘浬を隔てた太平洋の中から日本各地をはじめ全世界の同胞の上を念じつつここに筆を擱きます。どうぞみなさん大切にして下さい。

昭和八年二月八日大洋丸にて

二。ホノルルから

九日の朝七時、船はホノルルの棧橋に着いた。檢疫も移民官の檢査も造作なくすみ、税關はあの澤山の荷物を一々調べるので暇がとつた。フキルムは一尺一セントで百弗の關税が要る。つまり關税が五百圓要るわけだ。扇子などにも十一弗かかつた。玉代勢君を始め佛青の安井君、大谷派別院の松平君やその他澤山な人の迎へをうけた。二人とも頸の廻らぬほどレイをかけてもらうた。新聞社の寫眞班がデッキで寫眞をとつてくれた。記者が簡單な談話の筆記をもしてくれた。すぐに大谷派別院につき、舊知の人達に逢うた。別院の婆やが先年私の好きだつたものをよく覺えてゐて御馳走してくれたのも嬉しかつた。玉代勢君らの案内で布哇報知・日布時事二新聞社をはじめ、領事館・眞言宗・淨土宗・西本願寺・曹洞宗・日蓮宗各別院を歴訪し、今村惠猛師の五十日忌に當ると聞き、法名に讀經し、令室と令息に逢うて感深し。訪問を終つてから定められてあるヌアヌ街の共樂館についた。閑靜なホテルだ。一人に一室づつ與へられた。

夜は大谷派別院で講話した。泉原君は風邪にて急に發熱したといふのでヒロから出て來られなかつた。

十日。今日も雨が降つた。晝の内は訪問客を受けた。武雄は玉代勢君の助けによつて荷物の整理をした。夕方からモリリイの東本願寺へ晩餐をよばれに行つた。先年無かつた大きなよい會堂が建つてゐる。開教師は毛利典攬君である。

十一日。午前中武雄のエピキュラスの飜譯を聞く。午後來訪者多し。夜は佛青にて講話をした。

十二日。午前玉代勢君の案内でワイキキの海岸やらローヤルハワイアンホテルの庭園やらを見る。玉代勢君の家にて晝飯をよばれ、二時からモリリイの東本願寺にて講演。後歡迎會。五時からアドバータイザー樓上にてラヂオ放送。六時から佛青のカク

テルにて歡迎會開かる。來會者四十餘名。更くるまで語る。

十三日。雨。午前ビショップ博物館に本島土人の昔をしのび、ワイキキの海岸にて晝飯を認め、水族館を見る。夕方からエワといふ處に講話に行くことになつてゐたが猛雨のため開會が出來ぬからと斷つて來たので、新聞社の依頼に應ずるために論文『此の火柱を見よ』の一文を草した。玉代勢君は武雄を助けて久しく原稿の整理をしてくれた。ホノルルについてから毎日の雨、合服に薄いシャツでやや寒い氣がする。しかしハワイの人は浴衣一枚着てゐる。そして濱に行くと海水浴者がある。爲替相場が弗と圓と餘りに隔てがあるので、すべての物價を圓價に換算するとびつくりすることばかりである。百圓で二十弗しか貰へない。その一弗は日本の一圓ほどしか價値がないのだから日本の金を持つて來て此處で使つたら大變なものだ。失業者には國費の補助があつて仕事が與へられる。獨身者には一週三日一弗づつ、夫婦にて子供のある者には一週四日一日二弗づつださうな。日傭が一日三弗、大工の日給が四弗。これを圓

に換算すると大工の日給が二十圓、日傭が十五圓になる。失業者の勞働にさへ一日十圓支給されるのだから大分日本と違つてゐる。

滿洲問題が起つてから、こちらにをる日本人に對して西洋人が特別の畏敬の態度を表してゐるさうだ。在留邦人は內地にゐる者以上に國家の安危を氣にかけてをる。私も武雄も達者でをる。私は椰子の樹蔭で或はマンゴーの林でマイナーの囀りを聞いてセイロン・印度の旅を思出してをる。明日は日本に向つて淺間丸が出發するといふのでこの文を出すことにする。淺間丸は午後五時に出帆するのだが、私達は午後四時出帆の船にてヒロに向ひます。多分この報道は三月號の『願慧』に載ることと思ふ。ハイピスカスの赤い花を眺めつつ、冬の寒さにふるへてる故國の人達の上に恙なかれと念じられる。みなさん、どうぞ大切にして下さい。

（昭和八年二月十三日ホノルルヌアヌ街共樂館にて）

三。ヒロ日記

二月十四日。今日ホノルルからヒロに渡ることになつてをる。午前中强雨、松平・毛利・安井・戸田等の諸君來訪、玉代勢君と武雄と荷物の準備をする、三時半宿を出てワイアレアレ號の二階十六號、船賃二人にて三十三弗、空美しく晴る。我が船に乘る時には何時も凪になるというてゐた豫言が當つたと玉代勢君よろこぶ。安井・清永・共樂館主人等に送らる、四時出帆、よく眠る。船中ハワイ小唄が出來た。

十五日。朝七時ヒロに着く、よく晴る。泉原君を初め、各宗寺院ヒロの有志その他三十人餘りの人に迎へらる、昨秋新築の本願寺に入る、舊知の人達と語りつづく。午後吉村ドクターの案内で十二哩を距る海岸にシップマン氏の庭園を見る。フイリッピンからきたといふたこの樹と稱する樹の林、サモアから來たといふ低いココナッの林などめづらしいものであつた。樹にうゑつけた熱帶の蘭が美しい花を見せてゐる。脊丈に餘るベコニヤの花は冬を知らぬげに咲いてゐる。パンの大樹に實がなつてゐるのも初めてみた。パパイヤとペアをもいで貰うた。午後六時から寺の階下の青年會館にてヒロの有志すべてを招いて紹介の宴が開かれた。澤井開教使の挨拶、青年會長の挨拶後、余と武雄と又挨拶す。宴終つて本堂にて日本現在の趨勢について語る。久しぶりにて日本間の疊の上に寢る。風邪と聞いた泉原君の無事に働いてゐるのを見てうれしく思うた。遲くなつてから、主として日本より私を招いた町田夫人が吉村病院に病んでゐるのを見舞うた。

十六日。朝少し雨を見たがおほむね晴れてゐた。吉村ドクターに案内せられて海岸の入江に浮べる水亭で晝飯す。會食するもの樋口・曾我部の兩牧師・寺本西本願寺・田原弘日語校長・泉原・吉村の五人と余等二人であつた。エナの料理はうまかつた。午後七時から劇場にてハワイ毎日新聞社發起の講演會が開かれた。德城社長のあいさつの後、「自力更生と他力本願」と題して二席語つた。會するもの五百、すこぶる盛會だつ

た。パンフレット一冊十仙としてうつたところ三百二十冊うれたといふことをきいた。もつていかに知識欲にうゑてゐるといふことが察せられる。

十七日。時に微雨あれど、おほむね晴。午前中接客。午後揮毫。三時出發。十七哩を距るコンテンピュー村にゆく。學校にて生徒に講話。後二個所の墓地にて讀經。校長武内常雄君は秋田本莊の人、昨年嘗て茶を汲んで貰うた細君が逝かれたので新しい墓前で讀經した。山田龜吉氏方にて夕飯。七時から同氏所有の劇場にて講話會開かる。武内校長の挨拶の後二時間ばかり語る。パンフレットを買うた者百二十人あつたといふ。

十八日。折々微雨あれど溫かき陽を見る。十一時頃から吉村君を訪ね、蘭の花など見る。くさぐさの蘭の花など咲けり。深紅のつつじ、桃色のハイピスカス等美し。町田氏病床を出でてパーラに來る。寺本君來る。二時頃辭去。あまり腹のあんばいがわるかつたので背部に灸をしてもらうた。夕方少し下痢したのでややさつぱりしたが、まだ腹が太鼓のやうにはつてゐるので不愉快だ。七時ババイコの本願寺に行く、先年居た佐藤開教使、一昨年死去。今は若い開教師藤家君あり。講話二席、後酒肴の饗あり。雨中をかへる。小唄を一つ得た。

十九日。晴れたり降つたり。腹痛あり。下痢二三回。灸をして懷爐を入れ熊參丸をのんで横はる。午後十五哩を距るホノム村西本願寺にゆく。開教使齋藤誠眼君は越前の人。講話二席。夜はホノルル郊外のワイケヤ中央日本語學校にて講話二席。のち小作の狀態をきく。從來醫藥住宅等を會社より出費してゐたのだが、本年俄かに會社より日給の内日に五十錢づつ減じ、その料に充てることになつたので小作人一同大狼狽。しかも小作爭議も起されずといふことを聽く。これほど減ぜられてもこちらは日本内地よりも暮しよいらしい。日本の給料等のことを米貨に換算して聞かしたところ驚いてゐる。

二十日。雨。午前六時半晨朝。今日より正信偈講話を始む。二十哩餘を距るところより開教使夫婦聽聞に來るときき、殊勝のことと思ふ。下痢三回。後放屁五六十。腹痛あれどいやな氣持去る。懷爐を入れ、灸をする。午後揮毫。夜三十六哩を去る村、カイアウの日本語學校にゆき講話。校長下川範三君は熊本縣八代在の人。此の學校には生徒六十。校長夫妻にてこれを教授す。强雨の爲め集るもの四五十。講話二席。後茶ものまずに歸る。歸れば零時半。カーブの多い崖の道をゆくので車の動搖が激しかつた。

山をこえ谷をわたりてゆけどゆけどさときび畠に離れざるかな。

大雨にさらさらと音がするきびの山道ふみてかへれり。

二十一日。六時晨朝。正信偈講話。午後灸、按摩。下痢二回。午後五時半出發。西方三十三哩を距るオーカラ日本語學校にゆく。講話二席。教師は北島昌雄君。淨土宗の僧にして佐賀の人。青年會長星出義一君世話を燒く。往復昨日ほどの强雨なし。十二時にかへる。日本式のゼンザイはうまかつた。一生堂へカード註文。總へ幕の註文を申し送る。

二十二日。稀に晴る。今日は聖德太子の御命日。國では高光君や藤原君や林君が來て御法事を申してゐてくれることと思うて遙に思を故國に寄せてゐた。午前六時正信偈講話。下痢止み、腹具合ややよし。澤井夫人風邪の爲め灸をせず。午後七時半より樋口牧師のヒロ教會にて講話。各宗信者が自分の道を信ずる爲めに他の法をそしつてはいけないといふことを語り、ゼルサレム巡禮記を語る。歸途吉村家に立ち寄り、更けてから歸る。

二十三日。晴。暖氣やや加はりたる爲めか體の具合よし。午前六時正信偈法話。藤本・小島兩家を訪ひ、双方にて小經をよむ。藤本家にては主人の面影を偲んだ。小島家には三十にみたない長男が昨年死せりと聞く。午後灸をしてしばらく眠る。午後七時から連續講話の第一日始まる。第一席歎異鈔の明治文化史上に與へたる影響を語る。第二席序文を講ず。會する者開教使・教師・牧師・醫師、ヒロの知識階級の凡てを殆ど網羅してゐたといふ。會費は三夜連續一弗といふ。男女二百四五十、靜寂の氣みつ。

二十四日。時々雨降る。午後六時正信偈法話。午前十一時吉村家にゆく。カシハのスキ燒をよばる。三時歸宅。午睡。お灸。七時より歎異鈔連續講座第二日。第一節を講じ終る。

二十五日。晴れたれど折々雨。午前六時正信偈法話。椰子島日本公園に散歩。ハワイに來てから車なしに外出したる初めなり。午睡。午後七時より連續講話。二席に亙りて歎異鈔第二節を講じ終る。後茶話會。會員感想をのぶ。

みほとけに捧げられたる花の香をふかく吸ひつつ法を聽くかな。

花ずきの我は日毎にみほとけのいろいろの花をなつかしみをり。

そのうちの珍らしき花を家づとにせんとて文の中に挾めり。

夜お灸をしてねる。

二十六日。雨降る。午前六時朝事、正信偈法話。一週間の報恩講滿足に終つたのをよろこぶ。光明の終りまでいただき終る。十時吉村家に立ちより、十時半より獨立學校に於ける教育會にて講話。理事長佐藤君挨拶、武内常男君謝辭をのぶ。二時よりオ

ーラウ本願寺にて講話二席。開教使松林秀信君。此れより二十三哩を距るカッパホにゆく。奥田隆一家にて夕飯をよばる。學校にて講話二席。校長三浦源平君。三十二哩の道を更けて歸る。今日は疲れた。灸をしてねる。

椰子の樹の林をゆけば白々と日日草の咲いてをるかな。

二十七日。雨强く降る。雷を聞く。朝事の法話がなかつたので九時までねる。藤本夫人に示談。吉村家にて晝飯をよばる。寺本・橘・藤原・三君に逢ふ。午後稻田夫人に示談。夜七時逮夜。後武雄語り我も語る。灸をしてねる。便通やや常に復す。

二十八日。强雨。朝六時半御命日御日中正信偈法話。午睡後海岸にドライブ。夜七時兩親の命日逮夜。武雄と共に昨夜のつづきの法話。灸をしてねる。

あかあかと陽の照り雲も見えざるに何處よりかは强き雨ふる。

海ぞひのラハラ林のあちこちにカナカ人住む小さき家見ゆ。

新聞によりて英國が日支兩國に軍需品を賣ることを禁ずることを公言し、米國がフーヴァが英國と同じ提議をせんことを下院の外交院に謀りたるに、彼等がフーヴァの提議に反對したりと傳ふ。英が我に親しみ米が我に反する傾向あらはれ來る。外交問題は之から複雜の度を加へ來る。余はどこまでも日米親善の念願を保持するものなり。

三月一日。晝の中は珍らしく晴れたれど、夜に入つて强雨來る。六時半先考の御命日御日中の勤行後正信偈法話。午後二時胡川誠一君に方便法身の尊像を授與す。氏の宅にゆく。新しき佛壇に安置して小經讀誦後法話。午後七時半オーラハキャムプの託兒所にて講話二席。中原福藏氏宅にて茶の饗をうく。歸つてから灸をしてねる。

二日。晝の中よく晴れ、夜になつて降る。火山測候所のジャガ博士の地震器の觀測によれば、本日午後三時海嘯來るべしとの警告を與へたるため、人々やや不安の色あらはる。午後二時頃日本よりのラヂオ通信の「今朝六時岩手縣石卷方面に地震海嘯あり、人畜の死傷夥し。」との報來る。三時半頃海水二尺ほど急速度を以て增減するほどの海嘯來る。日本沿岸の海嘯の餘波なるべきか。ジャガ博士の豫言當れるを人々感じ合ふ。故國の同胞に此の難のあることを悲しむ。午後七時半より椰子島日本語學校にて教育の本質に就て語る。父兄會長柳原良一氏司會す。ふさ・みさを・眞田・平井・藤本より來信。雪のしらせをもたらす、一同揃うて健在の由よろこぶ、灸をしてねる。

三日。終日天候不穩。風あり雨あり。東北海嘯の詳報を新聞でみる。痛心切なり。廣島法正寺寺中植田凝道氏去る十一日死亡の報昨夜到來。今朝讀經。夜ペペケオのエールキャムプのダウンビローの會館にて講演。齋藤誠眼開敎使司會。講話二席。後野口玉作氏方にて饗應をうく。灸をしてねる。

四日。風やみたれど雨。午前より午後へかけて晝をかく。七時よりペペケオ日本語學校にゆき、講話二席。校長山田友吉氏司會す。校長の細君の父入水保三郎氏本年六十七歳になるといふ。明治二十三年契約移民として渡る。その時は月給十五弗。中二弗半を强制貯金せしめられ、一弗三十五仙を渡航費として削除せらる。一ヶ月二十六日勞働して十弗十五仙得るのみである。朝早くからむちを持つて後からゴーヘイゴーヘイと牛馬の如く白人に追はれて黍畠に出たものであつた。共に渡航したものは七十八人居た。一ヶ年の中に八人まで死んだ。渡航してから二年目にホノルルに眞宗の寺が開けるやうに盡力した。その時の勞働者は六疊間に八人もねるといふ有樣であつた。食費は五弗五十仙かかつた。折々十仙づつ醵金して法座を開いたものであつたなど、涙を以て語るのを聞いて、我も涙を催した。子供も五人あつたが、二人死し、長男には十三の孫が出來てゐる。次の女の子はホノルルの大學を了へて、いま公立學校に敎

師をしてゐる。これが山田校長の細君である。末子はシカゴの醫大を卒業して目下シカゴ醫大に研修中の由。その子が學問すればするほど分らなくなるというてきたのを聞いて誠にうれしかつた。自分も四十年來法義を聽聞してきたが、自分といふことに氣のついたのは一年前からのことである。今日でも何も分らぬ地獄一定の身であるといふことだけが知られましたなど、眞實の溢れた話をするので、ハワイにもこんな強信な人もあるのをうれしいと思うた。カシハのスキ燒などよばれて歸る。今日晝笹井君の日記を聞いた。感服した。コナの山に一人で默々としてコーヒーをつくり深い瞑想に耽つてゐる彼をなつかしく思うた。泉原君が潛水艇ならあんたは機械水雷のやうだと笑つた。默々としてゐるが、さはれば戰鬪艦でも顚覆する力を有つてゐるといふことを語つたのである。

畫に題して

金魚

午睡さめて欄に海見る

チユリップ

ゆかたの袖が風にふくらむ

たねまきをへてほつと息つく

葉雞頭

とんぼがふたつ垣をこえとぶ

ざくろ

まいなのなきねきいて茶をくむ

柿

飛行機うなるそらにくもなし

蘭

古佛の前に更けて經よむ

黍

海邊の丘を風がさらさら

葉雞頭

秋色みてりお庭ひろびろ

山百合

山寺いでて森に鳥きく

チユリップ

シガーをくはへあるく朝庭

五日。微雨折々來る。今日から一週間朝事法話を初む。六時正信偈法話。九時日曜學校生徒の爲に訓話。十一時出發、火山にゆく。頂上にて握飯を食ふ。二時パハラの本願寺につく。開敎使石浦宗賢君は熊本の人。銀行員鹽見政一君世話す。ナレフ本願寺の開敎使菊池智旭君來る。佐賀の人。最初の『精神界』をよみをるといふ。なつかし。

石浦・菊池二開敎使に逢うて、初めて開敎使らしき開敎使に逢うたことをよろこんだ。三時から歎異鈔第二席講話。七時から一席滿洲問題。一席歎異鈔のつづき。宿泊せしむべくベッドのフトンを新調して待てり。九時半講話を了へて歸途につく。椰子島本願寺に入れば十二時に近し。今日の同行者笹井夫妻・藤本夫人・植野・出尾・木村・泉原・武雄なり。灸をしてねる。

六日。

雞の多き島かな夜もすがら鷄のこゑのつづき聞ゆる。

めづらしき眞白の花をほむる聲に夢さめぬれば窓白みをり。

大いなる岩の切れ間ゆぷすぷすと煙ふきでる岩ふみあるく。

煙たつ岩間の小岩ひろはんと寄れば熱さの手に傳はれり。

みほとけに命ささげて勇ましく生くる人はもその手とらまし。

雨ふりつづき、稀に陽を見る。今日は佐々木月樵君・隣玉叔父の祥月命日なり。清澤先生の命日でもあるので、六時勤行の時讀經。後正信偈を讃仰す。午前暫く眠る。午後寺本君の案内にて佛教研究に志ある眼鏡醫師ホープ氏來訪、初對面なり。夕方オノメアにゆく。小路末次郎家にて饗をうく。泉原・澤井兩君を初め、十餘人皆よばる。此家の夫婦は三寶供養を樂みとせる人々ときき、殊勝のことと思ふ。學校にて講話二席。校長古生美男君司會す。彼は備後の人、日本より名士が來る毎に必ず此村に迎ふることに努むといふ。村の戸數は五六十といふに感心のことなり。講話後抹茶の饗をうく。渡布以來初めてのこととて殊にうまかつた。唐辛の杖と栴檀の杖とを貰ふ。途中歌を得た。

ココナツの實の總なれる丈高きココナツの樹に月のかくれり。

御供養を樂しみとせる黍つくりの家に招かれてもてなされけり。

講話果てまた彼の家に立ちよりて茶がゆの馳走をうけにけるかな。

唐辛の太き幹もてつくりたる杖もらひけり村の教師に。

香の高き栴檀の樹の杖貰ひ子供のごとく悅べるかな。

遠國の島のキャンプにゆくりなく抹茶よばれて月の海みる。

佛敎の信心あつき村にきて白き鳥居のみ社を見る。
大和人は何處にゆくも寺をたて社をまつる奇魂をもつ。
歸りの自動車の中で植野さんから契約移民時代の數へ歌を聞いた。

一つとせ、人も知りたるハワイ國
樂しく御金がまうかると
皆さん思うて志願する。
二つとせ、二親離れて出る時は
早くかへれと二親が
いはれた此のこと忘れやせぬ。

三つとせ、見る人逢ふ人皆他人
せめて女房があるなれば
此のやうな苦勞はありやすまい。
四つとせ、夜晝思ふは國のこと
三年滿期の切れるまで
明けくれ指をり數へまつ。
五つとせ、午前五時から午後の五時
我が家に歸るは六時頃
三年滿期の切れるまで。
六つとせ、無間地獄はハワイ國
主人が閻魔でルナが鬼
日々此の人が攻めかける。
七つとせ、泣く泣く仕事に出るけれど

お金が殘らぬハワイ國
一つは品物高いから。
八つとせ、やにこい仕事は厭はねど
日々仕事を勵むゆゑ
どうして此身が立つものか。
九つとせ、此處で辛抱するほどに
故郷で辛抱したなれば
此のやうな難儀はありやすまい。
十とせ、遠く離れて外國へ
苦勞するのも末の爲め
一つはお金が貯めたさに。
十一とせ、一回二回に來た人と
同じお金がまうかると

皆さん思うて志願する。
十二とせ、二度と世にないこの苦勞は
わからぬ唐人に使はれて
言葉はわからで困ります。
十三とせ、三度の食事を食ふばかり
酒と女を禁治して
國に錦が飾りたい。
十四とせ、死んで冥土にゆく人は
國に殘りし親様が
さだめて後悔するであろ。
十五とせ、御緣話はたまさかに
耶蘇に入れとすすめくる
どうして成佛するであろ。

十六とせ、ろくに様子は聞かずして
即席ハワイにおもむいて
胸に手をやり案じます。
十七とせ、七分五厘やハーフデーや
日々月給さしひかれ
どうして此身が立つものか。
十八とせ、ハワイと日本は氣候ちがひ
熱病脚氣が流行する
ほんに恐ろし國である。
十九とせ、苦もなく三年つとむれば
早く歸りて親様に
つらい此の事話したい。
二十とせ、日本とハワイの條約は

三年滿期の切れるまで
つとめにやならない此の身體。

七日。強雨ふりつづく。六時晨朝正信偈講話。九時迎へをうけてドクターホープの家にゆく。木本君も同席、佛教に就て種々語る。中飯には吉村君・町田夫人らと共にカシハのスキ燒を食ふ。揮毫。午睡。五時半よりパオアへゆく。ヒロを去ること十九哩。日本人二百人くらゐのキャンプの青年會館にて講話。先年も此處で講話をした。此處の校長は伊津野時雄君なり。熊本縣の人。日本人會の主人椎木盛次君は鹿兒島縣の人。昨日も今日も澤井夫人病氣、誰も灸をしてくれず。

はち切れる願ひに生きぬ妨ぐる事のすべてをはねとばしつつ。

ほの暗き本堂に念佛のこゑをきく朝のつとめに心のはるる。

八日。よく降るなあと思ふほど雨。朝六時の晨朝正信偈法話。八時半ホープ氏を訪うて眼を見て貰ふ。パパイユに金子ドクターに診察をうく。ホープ氏も同行。血壓百五十二、他に何等の故障なし。ホープ氏のすすめに隨ひ、ちと高價なれどアメリカ式の眼鏡を約束す、二十七弗(日本金の百圓)といふ。然し此國としては止むを得ざることか。午後午睡。ソヴェットが聯盟にオブザーバーを出さざることを聲明したといふ報をきく。聯盟は遠からず總くづれとならむか。七時から獨立學校にて十七條憲法の講話をす、二席。佐藤君司會。布哇毎日の大久保君開會に至りし順序を述ぶ。歸途吉村家に立ちよる。

九日。雨。六時より晨朝正信偈法話。午前中に『改悔文講話』の速記を訂正し終る。吉村家にて晝飯の饗をうく。泉原・德城等の諸君同席。午後午睡。七時より獨立學校にて十七條憲法を講じ、歸途吉村家に立ちよる。

十日。雨。六時晨朝正信偈法話。身體何となくはいだるく、午前と午後と床に横はる。その間に揮毫數十、獨立學校校長篠田義雄君の宅にて夕飯の饗をうく。七時より十七條憲法第三回目の講話を終る。ペペケオの山田校長、會衆を代表しての謝辭に會衆涙に咽ぶ。ロスアンゼルスに地震ありたりと傳へられ、海嘯あるべしとて、海岸の人等うちさわぐ。遙に熱河の平定を確かにした陸軍記念日の日本を懷ふ。そして又米國のモラトリアムに依つて起れる日本經濟界の波動を思ふ。世界はつねに多事である。

十一日。珍らしく晴れた。午後『神代の女性』と『佛心の顯現としての滿洲問題』を見る。二つの速記を訂正した。日本から總・竹下・小坂・北川・増田通子、米國から竹垣等諸氏の來書。夕方から淨土宗の御寺にて夕飯をよばれ、法然聖人の御忌法話として、法然聖人を讃仰したてまつる。ホープ氏にたのんだ眼鏡が出來てきた。やや花色かかつた楕圓のグラス、金縁、代金は二十七弗。百圓の眼鏡だと思ふと大切にする氣が起

る、眼がつかれぬやうだ。

四。ヒロから

二月十四日の夜ホノルルを發つた。晝まで豪雨だつた。午後四時船に乘るまでにからつとはれた。わしが船に乘ればなぎになるというてゐたので、豫言が當つたと送つて來た人が笑つてゐた。十五日の午前七時にヒロについた。風邪を引いたというてよこされた泉原君もにこにこして先頭に立ち、二三十人の人と共ににぎやかに迎へてくれられた。直ちに新築の本願寺に入る。本堂はギボシなどついた高欄もある。大分日本式だ。本堂の後には疊を敷いた室もある。昨夜は半月振で疊の上に寢た。お寺は泉原君と澤井君夫婦とだけである。次々と舊知の方や新しい方が訪ねて來られた。晝飯後吉村ドクトルの案内で十二哩距つたシップマンといふ本島第一の地主の庭園を見に行つた。フイリッピンのタコの樹と稱するタコのやうな根の上つた樹の林、サモアのココナッといふ背の低いココナッの林もめづらしかつた。いろいろの樹の枝にめづらしい蘭を植ゑてある。それが花をつけてゐるのもあつた。ベコニヤは私の背よりも高くて花をつけてゐる。パパイヤとベーアをもいで貰つた。武雄は初めてパパイヤの木を見たというてをる。

午後六時から階下の食堂で歡迎會が開かれた。ヒロの各方面の名士の會合であつた。各宗僧侶牧師教育者五六十名の集會であつた。宴會後久しく語り合つた。ヒロは雨の多い處であるのに、昨日はハワイへきて初めての晴天であつた。晝になると汗が出るし、夜は蚊が出る。

此處へつくとポートランドの竹垣君と平松子との手紙がついてゐた。竹垣君のは米本國に來てほしいといふ招待狀である。平松子の文によつて雪の北安出を想像し、皆の健康を念じてをる。十三日の夜、遙かにゼネバの空を思ひつつ『此の火柱を見よ』の一篇が出來たので、ホノルルとヒロとの新聞に掲載することになつた。それは別送の通りだ。四月の『願慧』に出して下さい。一昨夜の船の中でハワイ小唄が出來たのでこちらの新聞にのせました。

これから來月の十五日までここに滯在し、ハワイ島の各地に出張して講演することになつてをる。比較的ゆつくりした日を得ることと思ひます。大切にして下さい。

（昭和八年二月十六日ヒロにて）

みんなが障りがないか。今日から聖德太子の法事なので總がかりで働いてゐると思ふ。高光・藤原・北川・林等の諸君がきたらよろしく傳へて下さい。泉原君は壯者を凌ぐ元氣で大活動をして居られます。講演は大抵夜です。昨夜は三十八哩を距る處に參りました。カーブの多い海岸の山道、しかも豪雨でアスファルトの道が滑るので危險千萬だつたが往復四時間の自動車で途中無事だつた。至極の田舍で砂糖きびを作つてゐる人達が三十人あまり小さな日本語學校に集つてをりました。しみじみこれらの人がかはいさうに思はれたので、しみじみ話してやりました。十二時半にかへり、ウドンをたべ、ウイスキを出して頂き入浴してぐつすり床に就いた。私は三日前から腹が惡い。灸と懷爐とでよくなるらしい。昨日は三回の下痢。屁が五六十出たのでやや樂になつた。殆ど絶食同樣にしてをる。こちらに來てから毎日朝寢をしてずるけるやうに思うたので、昨朝から毎朝六時から正信偈の講話をすることにした。二十哩も距てた處から通ふ人があるので感心してゐる。今日は淨華院の命日なので泉原・澤井兩君にお經をあげて貰ふ。武雄は寢不足がつづいたので昨日から齒がいたむというてゐる。今日も雨ふり。九日にハワイについてから雨を見ぬ日が二日ばかりあつただけだ。氣候も寒くて袷に袷羽織ぐらゐで丁度よい。夜は綿入の寢卷に蒲團を二枚着て丁度よいくらゐだ。こちらの御馳走は外に行くと、大抵マキズシ、サシミ、フライ、ヤキニク、サラダ、日本と支那と西洋とのちやんぽんの御馳走だ。私はチシヤ、キウリ、トマトがあるのでよろこんで居る。ことにパパイヤがうまいので外に何もいらぬやうな氣がしてゐる。今日はお晝を精進にして貰ふ。澤井君は若い開教使で越前の人、奥さんは鹿兒島生れで何かと世話をしてくれられる。お灸が中々上手だ。本賣りも上手だ。三月の十五日までこちらにをつてマウイ島に渡り、四日間滯在、それからホノルルを經てカワイ島に渡り、一週間滯在、三月二十九日から四月七日までホノルルに滯在、八

日から十五日まで再びヒロに滯在、十六日ヒロ發、十七日ホノルルに滯在、十八日出帆といふ豫定です。何處に行つても皆がなつかしがつてくれられるので日本に居ると少しもちがはぬ。肝腎に待つてゐた町田夫人が病氣で寢てゐるのでさびしい。留守中火の用心を大切にして息災でゐて下さい。まだ雪があることと思ふ。

（二月二十一日　ヒロにて―敏）

ヒロに來てから二週間經つた。今日は御命日なので昨夜と今夜と武雄と二人で講話した。明日はお父さんとお母さんの日柄であるので朝日中をつとめて講話をすることにした。私の腸胃は一昨日から平常に復した。然しまだお灸をつづけてゐる。武雄は齒がいたいというてアスピリンをのみつづけてゐる。毎日雨がふる。夜になると綿入がほしいほどに寒くなる。今日は椰子の汁を吸うた。一向うまくないものだ。吉村ドクターの家にデンドロビュームシンパルバムの立派な花が咲いてゐる。これだけは見せてあげたい。明日は『願慧』の發行日だ。もう雪が消えたか知ら。家の皆も村の誰彼

殊に出發の時に病んでゐた五間長の老人や松田伊三郎さんや理平さんの友治等の病氣はどうかと思うてゐる。よろしく傳へて下さい。三ヶ月の旅も三分一すんだ。早いものだ。毎日泉原君の顏を見ては爽のことを思うてゐる。よう似たものが出來たものだ。

（ヒロにて二月二十八日―敏）

五。ヒロから

ハワイに着いてからもう一ヶ月經ちました。溫かい處と聞いてきたのに相當に寒い。袷に袷羽織ぐらゐが丁度よい。先づ北國の十月頃の氣候です。殆ど雨のない日は無い。然し色々な花が咲きバナナやパパイヤが食べられます。

去る二日の三陸の地震の折にはこちらにも低い海嘯がありました。十日のロスアンゼルスの地震にも低い海嘯が見舞ひました。三陸及びロスアンゼルスにある道友の上に恙なかれと念じられます。

米國大統領ルーズベルト氏が就任早々去る六日モラトリアムの布令を出し、大仕掛

のインフレをやる様子。まだ今日まで銀行取引が停止されて居ります。日本との爲替相場も大變動があることと思ふ。此間にありて利害色々に各方面の人を襲ふことと思ひます。何となく騷々しい世の中です。

インフレをやつて民間に金を散らばいても、その金はまたたく間に資本家の金庫の中に吸收されてしまひます。そして不景氣が來ます。無資産者の金が資本家の懷に流れこまないやうな用意をせずして、いくらインフレをやつても駄目なのではないかと思はれます。どうしても今日の資本主義制度に何らかの徹底的な革新がなければ世界的不況の救治されることがあるまいと思はれます。

ハワイは米國の領土ではあるが、此處に住んで居る日本人は日本に住んでゐる者より一層日本の國威が擧がることを念じて居ります。日米戰爭など起る場合には日本が勝つやうに熱望して居ります。どうかしてそんなことが起きねばよいにと皆が念じてをります。

問題であつた國際聯盟も豫定通り脱退するやうになつた。そして豫定通り熱河を平定してしまつた。これから一歩をすすめて日・滿・支の三國の不可侵條約でも結ばるる氣運が來れかしと念じられます。

世の中は何時までも緊張して進まねばなりませぬ。お互に油斷なく精進せねばならぬと存じます。

日本を距る三千五百浬の果てのハワイのヒロの町から遙かに全世界の諸兄姉の健祥を念じます。

（昭和八年三月十一日夜布哇ヒロにて―敏）

六。三月十二日以後の日記

三月十二日。晴。朝六時半婦人會報恩講朝事。三陶六首引、正信偈法話、午後一時日中、式文、文類三首引、武雄登盤、澤井伽陀、泉原式間念佛、私は添へ調聲。巡讃第二首泉原、第三首澤井、後泉原君の挨拶あり、後私は聖人を讃仰。大衆に辨當が供せられた。夜七時から報恩講のつづき、正信偈三陶六首引、後聖人の讃仰二席。今日

の船にて日本に歸る人あり、速記の訂正其他の原稿を託す。心ややすがすがし。

十三日。晴。熱帶らしき日光を見る。午前男女同行五六と示談。午後阿部三次君の宅に行く。君は所謂第二世のアメリカ市民にてヒロ警察署の署長祕書をしてゐる人である。大きな池三つに依つてめぐらされた庭園内に廣きゼランダを有ち廣きパーラを有つた家に住めり。池には鯉、エナ、ホレホレなど飼ひおきて來客の御馳走にするといふ。パーラにをると海岸がよく見晴らされる。泉原・澤井夫妻・吉村君と共に夕飯をよばる。七時から西本願寺に行く。講演一席、後座談。不徹底なる行爲は遂に失敗に終るといふことを感じた。

椰子の樹の間に照る月光は爽かである。

十四日。晴。午前揮毫。午後四時からホノムの曾我部牧師の敎會に行く。曾我部四郎氏は福岡の人なり。ヒロの樋口牧師、パパイコウの北村牧師と夕飯を共にす。七時半から曾我部牧師の司會の下に講話二席。

十五日。晴。午前中來訪者相次ぐ。吉村家にて晝飯の饗を受く。泉原・寺本・原・藤家の各開敎使、川崎・阿部・植野等の諸君と共であつた。四時アレアレア號に乘る。見送人二三十。海上は穩かであつたが、二人共少し醉心地になつた。零時半マハイ島ラハイナに着く。ラハイナの東福寺ドクターに迎へられワイルクの東福寺ドクターの迎への自動車に乘り、一時半ワイルクの東福寺家に着く。五年前に泉原君と共に泊つた馴染の三階の室に寢る。

十六日。晴。船の疲れか餘りに體がだるかつたので九時過まで床を出なかつた。十時に朝飯をたべて晝飯をぬくことにした。淨土宗開敎使今村諦全氏、マウイ新聞社長安井里介君來訪。兩君の案内にて代理として武雄が各方面の訪問に出かく。先づワイルクの西本願寺、レコード新聞社、眞言宗、町田龜三郎氏、淨土宗、カフルイの美保

氏、同小學校の小林氏、プウネネの西本願寺、淨土宗、小學校を歴訪。午後東福寺ドクターに導かれパイア小學校を訪問、凡て英譯歎異鈔を呈す。此の間ゆつくり休む。夕方パーラのゼランダに息うて歌が出來た。

夕ぐれのゼランダに煙草を吸ひをれば花の匂のしめる風ふく。

ゼランダの前を覆ひて青葉なすキャップフラワーの高く匂へり。

大いなるキャップフラワーの香をしめる夕の風のなつかしきかな。

七時半よりプウネネの小學校にて講話二席。本願寺の泉覺性君司會す。校長を前原禎一郎君といふ。

十七日。晴。午前町田龜三郎・本好祐章二君來訪。渡邊館にて佛敎各宗聯合會の歡迎晝餐會催さる。來會者次の如し。

ワイルク本願寺　本好祐章氏（福井）
同　眞言宗　鳥取密明氏（香川）
同　淨土宗　今村諦全氏（長野）
プウネネ本願寺　泉　覺性氏（佐賀）
同　淨土宗　三上運海氏（島根）
パイア　本願寺　三枝善孝氏（廣島）
パウレア本願寺　藤谷晃道氏（島根）

午後七時ワイルク學園にて講話會開かる。司會者安井君、紹介者東福寺君。今日、日本へ送つた手紙に歌を書いた。

パパイヤを日毎朝餉の膳に見る春のハワイの旅のうれしき。

砂糖黍にさらさらと風わたる春のハワイの空うつくしき。

十八日。晴。午前神田重英氏來訪。氏は歐洲大戰の際赤十字社員として米國軍に從ひし人、初は無理をしてフランスに渡りしが、後に注意せられ、ニューヨーク出發以後の俸給を給せられた人である。丹波生れの人、歐洲大戰の裏面を語らる。午後東福寺ドクターの案内にてイヤオの谷を見る。

谷川の朽ちかかりたる橋に立ちニッヅルポイントを仰ぎみるかな。

空をつくニッヅルポイントの峰の上に白雲かかる神おはすごと。

島人が追ひつめられて血まみれに戰ひし谷とふ瀨の音高し。

歸路ワイアフの海岸に於ける東福寺君の別莊の邊にゆく。ゴルフリンクなどあり。

ワイアフの海邊に立てばどこからか砂糖くさき風の吹いてくるなり。

海沿のゴルフリンクの青草に自動車多く乘りすててあり。

マウイ新聞社に安井里介氏を訪うて歸る。五時頃から東福寺君の三男誠君に送られ下バイアの大畑誠一ドクターの家に行く。海岸の見晴よき家である。先年ここで京の壽司をよばれたことを思出した。主人は靜岡、細君は京の人、夕飯をよばる。

入海の向ひの山に沈みゆくあかき陽を見て涙せしかも。

七時からバイアの東福寺家にて講話二席。泉開教使司會す。

十九日。晴。朝九時三枝君に迎へられ三十五哩を距るクラ療養所にゆく。道路修繕中にてわるし。着くとすぐラヂオにて語り、男子病室で語り、女子病室にて又語る。歸路歌を得たり。

海をぬく四千呎の高丘に牧場ひろびろ雲雀なくなり。

山路をうねりうねりて登りゆくシャボテンの丘に雲雀なくなり。

歸途バイアの三枝君の寺にて晝飯をよばれ、午後一時半よりワイルク學園にて大和魂を講ずること二席、五時出發。東福寺父子に送られてラハイナの東福寺(香)ドクターの家につく。夕飯を共にする者、中野・福永・田畑の三君、東福寺二君と我等二人七

時半より學校にて講話。東福寺君司會す。零時半ワイアレアレ號に乘込む。田畑・福永の二君に送らる。空よく晴れて星光る。

二十日。晴。朝六時ホノルルに着く。玉代勢・清水君等に迎へられ、共樂館に入る。松任中野嚴華君今朝四時死去の電報、ヒロより轉電し來る。四五日以前二回までつづいて彼を夢みたので若しやと案じてゐたのだつた。病中我を念じてゐたのではなかつたか。弔電を發す。五語二弗五仙なり。總・平松・野本・米永きの・中本とく・伊藤つる・伊藤伊吉・久保瀨正雄・福田孝乃等より來信。玉代勢君にたのんで京都弘文社の堀井君に送金す。百五十弗が六百六十四圓となる。先にヒロより百三十五弗を送らしめたから二・三兩月分の印刷代が納まつたこととやや安心す。昭和二年共にダージリンに遊んだ畫家古城君、その後獨・佛・英・米を遍歷して歸國の途次數日前より此處に來てゐるとのことにて面會に來る。波多泰嚴君の手紙をあづかり來る。安井・毛利・松平・玉代勢四君を招いて晩餐を共にす。戸田・古城二君來室。九時ワイアレアレ號にてホノルル

出帆。玉代勢・戸田・清永・松平等の諸君に送られカワイ島に向ふ。

二十一日。晴。六時カワイ島リフェに着く。大館開教使夫妻を初め、内藤・緒方・栗崎等の諸君に迎へられ、シイサイドホテルにてカフェをのむ。八時過ぎリフェ本願寺にゆく。先年ここの青年會館で講話をしたことがある。開教使宮崎匪石氏はその折には不在だつたので今日初對面。氏は大聖寺生れ、福井に僧籍を有する人、午後別室にて休む。ワイメアより大江法爾君來訪。午後七時半から彼岸會の講話をした。宮崎氏司會す。後大館君に導かれて三十二哩を走りワイメアの大館君の寺に着いたのは午前一時だつた。新築の本堂に參詣。庫裏で暫く語り、定められてあつたワイメアホテルに入る。海岸に新築されたホテルの別館に波の音を聞きつつ眠る。

二十二日。雨。朝早く大館君、栗崎君を伴ひて來訪。曹洞宗の豊田・小澤二開教使、教團理事を伴ひて來訪。午後大江君久しく語りて去る。夕飯後大館君に伴はれて二十哩を距るコロア淨土宗の寺にて講話。開教使日野秀端君は山口縣の人。終つてから緒方増雄君の家にゆく。先年來た折にワイメアの同君の家に泊つた。

二十三日。晴。波の音に和してこほろぎのなく音が懐しい。十時頃目ざめて細君の案内でラワイビーチガーデンに遊んだ。此處の主人は八十近い獨身者である。自分の庭園を公園としてをるのだといふ。歸途スパーテンホールを見る。

ラワイビーチガーデンにて

丈高きジンジャにそうてときいろの花を見あげてただに驚く。

ジンジャとしいへば大和の茗荷ぐさその太幹のにぎりかぬるも。

川沿の崖に青々月に咲くナイトブリューメンシリースを見る。

松の樹に高くからめる蔓かづら日傘の如き大蔓をぞ見る。

老人がただ一人住むてふ庭園にいろいろの花の咲き匂ふかな。

草とりにハローといへば答せずふり向く顔のまくろなるかな。

とらの吠ゆるごとき音して岩間より潮の高く噴き出づるかな。

時をおきて高くふき出る潮を見てわだつみの意氣をおもひをるかな。

午後ククイヲロノ公園に遊ぶ。歸途ペケといふ赤い魚やら大根を買ふ。夕飯には、これらを純日本式に料理して貰うた。非常にうまかつた。

ククイヲロノ公園にて

園に入れば孔雀しづしづ芝生よりアイオンウッドの蔭に入りけり。

夕飯後、細君に送られてマカウエリのお寺にゆく。ここは大館君が兼務してをる。昨年プランテーションから新築して貰つたものといふ。彼岸會とて聽衆一般に赤飯の饗があつた。講話二席。世話方桑邊鹿太郎家にてビールなどよばれてかへる。

二十四日。晴。午前マカウエリプランテーションの社長に寺を建てた禮を言ひに行つた。大館君一家内の人達とパーキングサンドの海岸に遊んだ。午後は靜かに宿にゐた。初めてハワイらしい熱さを感じた。夕方大館夫妻、日本語學校長久保田君來訪。夜、小澤君に迎へられてワヒアワの曹洞宗の寺に行つて講話。夜に入つてから强雨があつた。

二十五日。晴。日の中は晴れて夜降る。午前十時マカウエリ日本語學校にて生徒の

爲に講話。午後揮毫。大館君のところにて夕飯をよばる。八時半より講話。今日諸方へ文を書く。中に小唄を得た。

二十六日。日の中は晴。夜に至つて雨。午前西本願寺の大江法爾君を訪ふ。ハワイへきて初めて歩行して人を訪うた。米田の植付をしてあるのを見て面白く思ふ。正午頃大館君に迎へられて東本願寺にゆく。午後三時から講話。リフェの宮崎開教使夫妻、大江開教使等來聽。夜八時半から本願寺にて歎異鈔講話。マカウエリ本願寺へお使に行つた青年のカーが衝突し、同乘の弟が怪我をして入院。自動車は大破損の由。大館君は晝は門徒の婆さんが臨終の法話の爲に、夜は自動車のトラブルの爲に聽講しなかつた。今日大江君のところでスターアップルといふ果物を頂いた。ペーアのやうな形をした味は柿によく似てゐる。椿のやうな樹だといふ。生れて初めてたべた。珍らしい果物である。

二十七日。晴。午前「二重國籍問題」を草す。午後大館君夫妻、大江君來訪。大江君に導かれて或花園にスターアップルの樹を見にゆき、果物を貰うてきた。

珍らしきスターアップルの樹を見んと友にさそはれ家を出にけり。

その森の妻が丈なす竹もちてスターアップルをとりてくれけり。

珍らしきスターアップルを手にもちて寫眞とりけり芭蕉にそへて。

午後五時半コロアの本願寺より迎へをうけて行く。内藤開教使俄の葬式とて不在。直ちに集れる人々に講話。その中内藤君歸り來る。夕飯をよばる。八時十分本願寺をたち、ワイメアの東本願寺についたのは九時、此間三十哩を距るのである。本願寺につくと、すでに聽衆は待つてゐる。直ちに歎異鈔を講ず。第二節まで講じ終る。

二十八日。晴。午前六時からワイメア日本語學校にて生徒の爲に講話。本願寺にて朝食。歸つてから「プランテーション時間」を草す。午後大江君夫妻・香川老人等餞別に來た。六時から本願寺にて送別會開かる。七時出發。リフェに向ふ。九時ワイアレアレ號に投じてリフェをたつ。海上波荒し、大館開教使夫妻・内藤開教使その他ワイメア東本願寺教團の人々が澤山見送つてくれられた。

二十九日。晴。朝六時ホノルルに着く。玉代勢・清永・共樂館主人等に迎へられて共樂館に入る。午前休む。午後「アメリカ人とは誰か」を草す。安井君來訪。夜七時半玉代勢君の會堂で彼岸會の法話をする。終つてから玉代勢君の義弟松村保君と快談。君はヤードボーイからたたきあげて今代言人となつてゐる。進擊精神に富んだ人だ。

三十日。晴。午前中ヒロ東本願寺の遷佛會と追弔會の表白文を書く。正午玉代勢君に導かれYMCAに於ける木曜午餐會に出席。

勝沼富造、奥村多喜衛、毛利伊賀、相賀安太郎、茂貫利次、田村牧師、高橋牧師、近藤菊次郎。

等の諸氏その他男多數出席。歸途清永君の家に立ちよる。夕飯後エワに行く。劇場にて講話。終つて大下廣介氏方にて茶菓の饗をうく。後藤覺衛・山崎初治の二君世話を燒く。今日家信があつた。『願慧』も來た。小唄が出來た。

三十一日。晴。午前七時玉代勢・松田二君の迎へをうけてリアヒホームに行く。此處は縣立結核病院なり。先年も此處に講話をした。松田開教使折々來て法を說くといふ。事務員新田君萬事世話を燒く。美しい佛壇が出來てゐたのがうれしかつた。此の前で英語で讃美歌の歌はれたのもうれしかつた。次に松田君の案内で刑務所を參觀に行く。門衛の巡査は制服をきてゐるが、典獄は白い背廣の若紳士である。愛嬌よく握手をして迎へてくれた。看手は丁寧に各處を案内してくれた。死刑室を最初に指紋室・監房・

食堂・獨房・闇室など順を追うて案内してくれた。食事は各人種の選擇に依つて西洋人はパン、日本人は飯、カナカはポイを主食とし、副食物は共通なさうな。次に癩病院を訪うたが、入場することが出來なかつた。次に奥村牧師の新築された天主閣を模した教會堂を參觀した。奥村氏の説によると、日本のお城の天主閣はキリスト教のチャーチであつて、天主はゴッド(神)のことであるといふ。その意義によつて此の會堂を建てたのだといふ。天主閣はゴッド(神)を祭る處といふ説は尤もらしく思はる。工費五萬弗を要したといふ。奥村氏は此處に住まずして自宅に住んでゐるのである。此處には吉田と稱する「私は百姓です」と名乘る人が留守をしてゐる。松田君と別れて玉代勢君と三人でヤングホテルで晝飯をたべる。美術館を見にゆく。ギリシャ・印度の古彫刻を親しく見た。次にリバチーハウスといふデパートに入つた。此處は衣服を主とする家である。きれいなドレスだと思うて値段を見たら二十九弗だといふ。日本金で百五十圓である。でも五十仙の洋服もあり、三弗の洋服もあるのが面白い。次に五仙ストアに入つてガラス器やら色々の物を買うた。夕方戸田君來訪。食後青柳・玉代勢二君に導かれ中央學校にゆく。青柳君の主宰せる文藝協會の催しである。「フランスに於ける宗教教育の分離の問題とロシアに於ける反宗教運動と日本に於ける思想傾向」といふことについて氣焰をあげた。

四月一日。晴。今日から青年會の朝の禮拜をすることになつてゐる。四時頃眼がさめたので、すぐドレスをきて床に横はつてゐた。五時半頃玉代勢君來り、安井君又來る。六時から青年會の朝のおつとめがあり後三十分ばかり話した。若い男女が五六十人集つた。靜かなしとやかないい會であつた。第一日本語唱歌、第二英語唱歌、第三三歸、第四ゴスペル　オブ　ブッダ(佛陀の福音)の朗讀、第五講話、第六禮讃、第七閉會の辭。七時歸宅。何にも喉に入れずして十時前まで寢た。玉代勢君に起されて本願寺の中學校に行つた。校長龍谷君の挨拶の後、男女上級生に大和魂を語つた。後、龍谷・松田・玉代勢三君と共にワイキキのニューマルといふ靜かなホテルにランチをとる。後、龍谷君と別れ、松田・玉代勢二君と共に支那街を見る。ココナッの家と稱する

骨董屋の土人のトーテムを初め古い器物が澤山ある。ほしいのが澤山あるが餘り高價なので買ふことが出來なかつた。ココナッ入のアイスクリームをたべ、此處を辭した。五時から小波津ドクターの家にて夕飯を供せらる。安井・毛利・玉代勢・與世盛開敎使の四君も一緒であつた。八時からモイリリの本願寺の降誕會に出席し、勤行の導師をし、後、歎異鈔講話二席。武雄は同窓會の開かれるので夕方からそこへ行つた。

四月二日。晴。安井君に迎へられ、六時佛青に男女學生百人餘り集る。唱歌等昨日の如し。萬物一體の理に就いて語る。玉代勢君に迎へられ九時から眞宗協會にて講話二席。晝飯をよばる。一時からカリヒの小學校にて母の會開かる、講話。校長は芹澤氏。三時から東別院にて講話。五時から歡迎會開かる。福島君に送られてモイリリに行く。八時から講話。今日はずゐぶん忙しい日だつた。併し無事につとめさして頂いて今床に横はり感謝の思が湧いてゐる。

四月三日。晴。午前六時安井・玉代勢二君に迎へられ、佛青に行く。第三日晨朝禮拜、講話。今日は五十人ばかり。ハワイに來てうれしき事の一つなり。よろこびの表現として會衆一同に『まことの心』をサインして贈る。午前ねむる。十時頃大關君來訪。揮毫。玉代勢君來る。十二時松平君に迎へられ、海岸のいけす樓にゆく。各宗監督の歡迎會開かる。眞言宗丹生實榮氏、淨土宗福田闡正氏、曹洞宗駒形善敎氏、日蓮宗渡邊公允氏、東本願寺松平融氏、西本願寺不參、余と武雄とが客として招かれたのである。初めて日本のウナギをたべた。氷づめで來たのだといふが、干ウナギの味がする。三時歸宅。日本から二十九通の手紙が來た。二時間ばかりかかつてよんだ。五時出發。玉代勢君に導かれ、松田君も同道してワイパフの本願寺に向ふ。途中ワイマノの低能兒收容所を訪ぬ。院長ドクター、テーラー氏丁寧に案内せらる。氣持のいい人格者であつた。七時すぎに本願寺につき、直ちに理事たちと會食。八時から學校の講堂にて滿堂せる聽衆に二席講話。宿に歸つたのは十一時半だつた。

四月四日。晴。午前戸田君來訪。玉代勢君來訪。零時から二時まで宗政しげ子の案内にて土産の衣類を買ひにゆく。午後三時から曹洞宗のお寺にて女學校の生徒たちに講話。夜八時から佛青にて十七條憲法第一條講話。會者七十餘名。宿にかへり、宿の主人の請に應じて古城君の達磨の畫の讃をした。

人に逢はず壁に向ひてまる九年人まちをれば人の來にけり。

四月五日。晴。午前九時玉代勢君に誘はれて松田君の宅に行く。大きなトーテムを貰つてうれしかつた。佐々木君を訪うて支那の古錢を貰ふ。松田・玉代勢の二君とつれだつてココナツのハウスにゆく。トーテムと一緒に寫眞をうつしたり、トーテムを買うたりした。午後一時玉代勢君の案内でカネオへの説教場に行つて講話。主任開教使秋田君・松平君も來てゐた。七時半から青年會で第二夜の連續講話をした。後、安井・玉代勢二君來訪。『願慧』の報道など書く。

四月六日。晴。午前八時安井君に迎へられ、玉代勢君同道、安井君の宅に朝飯をよばれにゆく。歸つてから「ニューヨークとボストン」なる一文を草す。十一時から中井君の案内で朝日屋にベットを買ひにゆく。正午玉代勢君に導かれカリヒの谷本君の家に晝飯をよばれにゆく。芹澤君等同席。歸りにネクタイを買ふ。七時半から佛青にて十七條憲法第三講を語る。會衆に『まことの心』を一部づつ呈す。會後、松田・大關・玉代勢・川崎・松本等の諸氏來り更くるまで語る。

七。四月七日以後のハワイ日記

四月七日。晴。大關君に迎へられて西本願寺にハント氏を訪ふ。玉代勢君と晝飯を共にす。毛利・松平・安井・戸田・松田等の諸君來訪。四時ワイアレアレに乘る。玉代勢・清永・安井・松田・小林・久保田等の諸君に送らる。海上波靜かに月が美しかつた。

四月八日。晴。午前六時ヒロにつく。澤山の人々に迎へられ、東本願寺に入る。午

前中ヒロのプナハワイ、ワイナクの日本人墓所を訪ふ。無縁の木の墓標の朽ちてゐるのを哀れに感じ、五弗を喜捨して再建を請ふ。午睡後ワイアケアの四番ピアノ、カウマナの墓所を訪ふ。同地の日本語學校で講話。夜八時より東本願寺に於ける釋尊降誕會にあふ。後講話。墓參の道を折々負うて貰つた。これがため今日は疲勞が甚しかつた。

四月九日。晴。午前六時晨朝。正信偈道綽禪師の條を語る。九時から公園のヒロ全體の降誕會に出席、僅かばかり祝辭を述べ、午後一時半から東本願寺にて慶讃會をつとむ。日本からとりよせた舞樂のレコードを用ひ、稚兒も十四五人來り、行道散華して『小經』をよむ。記念撮影などす。夜は七時半から藤本氏等先亡者追弔會をつとむ。奏樂『小經』讀誦、後講話。綿のやうに疲れた。

追弔文

大日本親鸞聖人の門侶曉烏敏

阿彌陀佛の御像の前に花を捧げ、香を焚き、阿彌陀佛の本願の宿りたまへる藤本龜太郎氏その他本寺建立につき功勞ある人々の靈に白す。

御身等、人と生れて、あひ難き佛法にあひ、得がたき信心を得て、佛法宣流の道場を建設することにつとめたるは、御身らの此の世に於て受けたる惠の最も高大なるものなり。御身等の世に受けたる富は時を經て變ることあらんも、御身らの建てたる此の堂宇は朽ち果つることあらんも、御身等の堂宇建設の心の底に湧き出でたるその信心は南無阿彌陀佛と共に永へに榮えゆかん。御身等早く世を去りたるため、御身等が切に望みし堂宇再建成就せしも肉身にてそを見ることを得ざるは我等の悲みとするところなり。併し又既に報土に往生せし御身等の靈が此の法莚に影向して我等の報謝行の中に交ることを思ふとき、喜の涙に咽ばざるを得ざるなり。昨年の秋、本堂落成につき遷佛遷座の法會賑かに行はれ、今重ねて心こめたる大法宣流の遷佛遷座の法會行はる。不肖愚惡の身を以て遙々と此の梵莚に參向せしめらるること深重の因緣よろこびてもなほあまりあり。此の喜は御身等の悅なり、又御

身等の信心の友達の喜なり。しかも、その喜は壇上に立ちます阿彌陀如來の御喜にてましますなり。今日此の喜を御身等と共にせんと思ひて御身等の信心の友達と共に追弔の法會營まる。此の法會の緣に依りて又御身等の望める信心の友のますます加はること明かなり。ここに御身等と共に阿彌陀佛の御前にその加被力を渴仰し永へに此の御力の我等の上に加はらせたまふことを感謝したてまつる。

敬白文

大日本親鸞聖人の門侶曉烏敏

阿彌陀佛の御像の前に花を捧げ、香を焚き、謹みて白す。

大聖釋迦牟尼如來、摩迦陀國の王舍城のほとり耆闍崛山に於いて、阿彌陀如來の本願を說き給ひて一切衆生の依るべき道を示したまひしよりこのかた、曉の日の出でしが如く世の闇は晴れぬ。印度・支那・日本の高僧相承過つことなく、二千餘年の星霜を經て、ここに本願の御力、尊き人格となりて現はれたまへり、我が親鸞聖人は正にその人にておはします。聖人は今を距る七百六十年以前に大日本高倉天皇の承安三年四月一日花の都にて誕生ましませり。聖人に依りて他力信心の華鮮かに開き、大聖釋迦牟尼如來の覺の月明かに輝きぬ。聖人御入滅の後、遺しおきたまひし御法は年々に弘まり、日本國中の老若男女は申すに及ばず、今や全世界の知者も愚者も善人も惡人も此の聖人の御敎を仰ぐことにこれ後れざらんとするの有樣なり。今を距ること二十四年前、此の聖人の御敎は日本を距る四千浬の大洋の直中にあるアメリカハワイ縣にまで及べり。ここヒロ市にも聖人の崇めたまへる南無阿彌陀佛の聲にふるることを得るに至れり。これヒロに於ける西本願寺の初なり。聖人はなほこれにて心みたせたまはざりしにや、ヒロの住人藤本龜太郎の心に現はれたまひ、遠く藤本の鄕里の檀那寺なる廣島市法正寺の住職泉原寬海を招きて聖人傳統の本願のいはれを聞かんとせり。法正寺が東本願寺に屬するの故を以て東本願寺より本尊の御下賜を願ひ、此處にヒロ東本願寺の建設を見るに至れり。これは六年以前のこと

なり。宿因當來の故にや、佛祖の冥佑の篤きによるにや、建立日尚淺きにもかかはらず、聽法の爲に集れる信者日に加はり、堂宇の狹隘を告げしものから、再建の議起り、藤本はその志をなさずして往生し、多くの信心深き人々の懇志により昨年の春より夏にかけて新しき御堂再建せられたり。昨年の十月嚴かに遷佛遷座の儀式行はれぬ。その折、特に懇請せられたれど障ることありて來る能はず、約束によりて本年一月日本を立ち、二月九日にホノルルに着きて以來、今に二ヶ月となりぬ。その間、ハワイ・オアフ・カワイ・マウイの四島に巡錫し、ヒロ東本願寺の遷佛法會の法施を島の老若男女の上に施すことの喜ばしく、報謝行をつとめさせて頂けり。かくて本日はかさねて心こめたる遷佛奉讃會の法會につらなり、信心深き人々と共に此の新しき本堂に佛祖の御德を讃歎供養せしめられること何ごとの喜かこれに如かんや。不肖愚惡の身を以て此の尊き法會に參詣し、尊き心になれる此の本堂に本願海より化現ましましたる御像の前にひれ伏して念佛相續の大行をつとめさせて頂くことは此の上もなき悅なり。たゞに有難く涙の頰をつたふるを覺ゆ。これ大慈矜哀の御涙のしづくにあらずして何ぞや。伏して請ふ。親鸞聖人の上に現はれたまへる阿彌陀佛の本願力の永く此の道場に現はれたまひ、近くはハワイ八島、遠くはアメリカ全土に法雨をそそがせたまはんことを敬んで白す。

昭和八年四月九日

四月十日。雨。六時晨朝講話。德城・西村・末石等の諸氏と談話。レアイホームとヒロ病院とへ慰問に行く。午後按摩をとり、後揮毫數十枚。法事の後の强雨もしつとりしていいものだ。八時歎異鈔第六節講話。後茶話會。

四月十一日。晴。六時晨朝法話。午前墓標を書く。十一時出發、コハラに行く。一行我等二人の外、泉原・植野・島田・三宅・竹村夫婦・小島夫婦、都合十人。二臺の自動車に乘る。海岸の眺は美しけれど山原をうねりうねりて行くのだからはらはらするとこ

ろ多し。道程九十七哩にしてコハラキャムプの森田信太郎氏宅につく、信心深き人。原田勝人氏に逢ふ。午後八時公會堂にて講演會開かる。青年會は今井利松氏司會、岡開教使、杉本登貴吉牧師等來る。ベット少きためダブルベットに武雄と二人ねる。今日次の歌が出來た。

牛がなくワイメアの丘にたたずめば冷たき風の頰をなづるかな。

しづしづと道を横ぎる牛の群を車とどめて眺めをるかな。

その中の小さき牛がよちよちと母を追ひ行く可愛かりけり。

いろいろの粧ひしたる牛あそぶ山の牧場にひばりなくなり。

海ぞひの青草原に立ちつ居つあまたの馬のあそびをるなり。

草原に立ちてま白の波みればみそらに飛行機のうなりとびゆく。

四月十二日。晴。午前燈明臺を見に行く。それからニューリー海岸に遊ぶ。同所の松本京松氏方にて晝飯をよばる。後午睡。三時過コハラキャムプの森田氏宅にて十人ばかりの人に信心を語る。後原田氏の供養により夕飯を森田家にてたべる。八時からハフリの青年會館で講話。學校教師若山金藏氏司會す。終つてからニューリーの幸本家に泊る。森田氏はヒロの小島夫人の兄であり、幸本氏はヒロの竹村氏の從弟である。此の血緣に依りて法緣が結ばれたのである。

四月十三日。晴。朝幸本氏の新しき佛壇を求めたるに遷佛の讀經をして後法話。森田家に立ちより、途中まで諸君に送られ、二十七哩を距るワイメアにゆき、若山氏方

にて晝飯の饗を受く。午後學校にて講話。此の學校には生徒が百餘人あり。夫婦の先生が教へてゐる。教場に立派な佛壇が安置されてゐる。昔の寺小屋の觀あり。ワイメアの高原にして牛馬の牧場あり。日本人は野菜を作つてをる。玉チシャの味は特別にうまかつた。ワイメアからコナまで七十哩の道程のうち、中途二十哩ほどの間が非常に惡い道であつた。ちやうど道路改修の最中で、河原を自動車で走る觀があつた。コナより二十哩程のところまで菅村芳弘ドクターと笹井君とヒロの市川氏とが迎へに來た。予は菅村氏の車に招ぜられる。海岸のカイルアパレースを見物す。此處はカメハメハがコハラに生れ、此處に都した舊跡である。寫眞遺物など陳列してある。此處から山の方に二三哩登つたところにある日本人病院の院長菅村君の宅に行つて茶をよばる。菅村君は鹿兒島縣沖の永良部島の人である。夕方マナゴホテルに入る。此處の主人は久留米の人。コナの有志諸君と一行と會食。後田邊氏歡迎の辭を述べ、菅村氏紹介の勞をとる。後各自自己紹介をなす。後予一時間餘り講話。後談話。此處に泊る。コナはコーヒーの名產地にして仙境の感がある。風の少い處といふ。海上は實におだやかである。コーヒーの樹に白い花の咲いてゐるのもある。實が赤くなつてゐるのもある。はじめてコーヒーのなつてゐるのを見て興味つきず。笹井君は此處に住んでゐるのである。

四月十四日。朝菅村氏と共にコーヒーをのむ。八時半出發。十哩ほど來たところでコーヒーの枝を折らんと車をとどめたところ、車の火災を發見す。一時間ばかりにて修繕終る。コーヒーの林に休んでゐるひまに婦人たちは山いちごをとつてきてくれた。日本のものと異るところがない。

自動車の繕ひを待ち休みをれば赤きいちごをとりてたびけり。

白き花赤き實のなるコーヒーの樹いとめづらしく樹をたわめ見る。

六十哩にしてナレフキャムプの本願寺派の寺に菊池開教使を訪ふ。これより六十哩、ヒロに歸つたのは午後二時半である。コナ地方からカウ地方をすぎ、火山に入るまでは雨がふつてゐた。德城・吉村等の諸氏來訪、七時半から九時まで獨立學校にて第二世の人達に講話。九時半から十時までに婦人親交會のために講話。第一席には「アメリカの進んでゐる二つの道」と題して語り、第二席には「日本神代の女性」と題して語る。歸つてから泉原君は夜伽に出かけ、澤井君夫婦と我等としんみりと大法の奉持者たる道を語らふ。德城氏・町田氏より土產を貰ふ。

四月十五日。晴。六時晨朝法話。揮毫、接客に忙し。午前中村宮藏家に阿彌陀佛の像を贈る。午後川崎伊三吉氏の病床を見舞ひ、夕飯をよばる。七時半から歎異鈔第八節を講ず。後座談會開かる。

磯ぎはに車をとめて椰子島の月見てあればこほろぎのなく。

四月十六日。晴の後に微雨も來た。朝六時晨朝法話。正信偈を滿講した。十時から日曜學校生徒に語り、後、共同墓地に行き、今度新しく私が建てた無緣の墓を拜みに行き讀經。十一時から送別の宴がはられた。諸君が送別の辭を述べられた後、私も挨拶をし、教團に對する希望を述べた。午後一時から最後の講話をした。四千浬のあなたから私を招じたヒロの人々に別れがたい思ひがした。それから過ぐる七十日の間受けた所の厚意に對して感謝の念を禁ずる事が出來なかつた。午後四時澤山の男女の方から首のまはらぬ程レイをかけて貰うてワイアレアレ號にてヒロをたつた。武雄が九月まで此處に殘る事になり、ホノルルまで見送りの爲泉原君が同行した。一人一人の名をここに記す事を略して謹んで御親切に感謝する。武雄を一人殘して來たのでいつにない親らしい哀愁を感じた。海上波靜に泉原君と樣々の話をしながら安き眠りについた。

十七日。晴。午前六時ホノルルにつく。玉代勢君等に迎へられて共樂館に入る。泉原君は舊知の宿に行かれた。正午から何とかいふ海岸の旗亭で送別會が開かれ、龍谷・宮川・松田・西谷・戸田・松平・一條・玉代勢・安井・泉原其他三四の若い開敎師が出席せられた。午後は買物などした。夕飯は森ドクターの家にてよばれた。森氏は大聖寺町出身の老醫で小栗大將の令兄である。ヤソ敎の信者であるが、今回は私の講話も度々聽いて下さつたのである。夜は來訪の諸君と語り荷物の整理などして貰うた。

十八日。晴。朝早く森ドクターが來られたのを初めに、次々と來訪者があつた。中飯には共樂館に松平・安井・松田・戸田・玉代勢・森・泉原等の諸君を招いた。いよいよこれが最後の會食である。午後一時半から領事館の後庭で松岡洋右氏の演說があるといふので、安井君に導かれ群衆に交つて聞いた。男女多くの人が熱心に聞いて居た。ここにも愛國心のもえ立つのを感じた。政談演說といふのをはじめて聞いた、私がそれ程までに言はないでもよかろと思ふ樣な所になると群衆が拍手をする。敵を持つての話が一番よく分ると見える。三時半澤山の人にレイをかけて貰うて淺間丸に乘り込んだ。船室は百六十號であつた。淺間丸には國際聯盟に出席した我が首席全權松岡洋右氏が乘つて居るので物々しい警戒振りであつた。玉代勢君の二男の繁君といふ十五歲になる少年をつれて歸る事になつた。泉原君と船室で最後の握手をした時にこの島にこの人が居つて呉れたらこそ有難い御緣が結ばれたとしみじみ感謝の念が湧いた。同君の利己心を離れての活動ぶりには敬意をはらはずには居られなかつた。さうしていつまでも健在なれと念ぜられた。船がいよいよ出帆する時、赤いネクタイを結んだ小さい脊廣姿の繁君は私によりそうて涙をこぼして居た。おそらく送つて來た玉代勢君夫婦も泣いて居た事であらう。さらばホノルル、さらばホノルルのお友達、さらば全ハワイのお友達、もうおさらばです。過ぐる七十日の間いろいろお世話になりました。ありがたう。船が進んで各所に電報などうつてから御加護の中に尊き仕事を果さして貰うた喜びと、親しい人に別れて來た悲しみと、待つて居る人の澤山ある日本に歸る樂しみとが交々胸に往來した。いよいよ今日から一人思索の船の生活に入るのだと思

ふと勇み立つ様な感がした。

八。ホノルルから

今日は四月の五日です。ハワイに來てから今日で五十六日になります。その間に百回あまりの講演をしました。去る二日の日曜などは、朝の六時からと九時からと一時からと三時からと八時からと五箇所で五回の講演をしたこともあります。それでも一度も病のために休むことがなく、萬事都合よく今日までつとめさして頂きました。今度の滯在が第一回に來た時より比較的ゆつくりしてゐるので、人との親しみも厚くなり、うれしうあります。

私が日本をたつてから後に、澤山の親しい人が死なれました。松任の中野嚴華君、能代の和田龍造君、伊勢の市場八衞君、木浦の林大行君などが主なる人達です。釜石では渡邊君の母堂が海嘯の爲に死なれ、その他若い人達の亡くなられたのも二三に止りませぬ。だんだんと順を追うて此の世を去つてゆくのです。

三月の五日から新大統領ルーズベルト氏がモラトリアムを施行しました。二三日はハワイでも暗夜のやうな狀態でした。不景氣で困つてをる中にも活動寫眞館が何時も滿員ださうです。

このたよりは七日發の船にて出すのです。二十日に神戸につく船ですから、五月號の『願慧』に間に合ふことと思ひます。私は本月十八日ホノルル發淺間丸に乘り、二十七日に横濱につき、その夜東京にて曉烏會があり、夜行にて北安田に向ふつもりですから、此の便の載る雜誌は私の歸宅後に皆さんのお目に入ることになります。それも途中に何らかの難に遭へばどうなることかわかりません。すべてをお計ひにまかせて旅をしてゐる身にとつては何から何までありがたい仕合をうけてをります。

本年のハワイの氣候は例年にない寒いのださうです。昨夜は五十八度二分でした。晝でもこちらに來てから汗の出るやうな暑い日はありません。パパイヤとバナナはたべられるが、マンゴーも西瓜もまだ口に入りません。

歸りの船には松岡全權一行と同船の樣子だから色々有益な話も承れることと樂し

んでをります。

日本へ歸るなり豫定の通り旅をつづけたいと思うてゐます。お護りの下に志願滿足の日々を念じてゐて下さい。日本から三千五百浬を距てた地に於いて全世界の同胞の健祥を念じつつ此の筆を擱きます。

（昭和八年四月五日夜、ホノルルにて）

ブジデアサマニノツタ、チチウエノヤマイヨシトノデンミタ、二七ヒアサツク、ハヤ（ユウセンアサママルテウシムセン四月十八日）

九。北安田たより

船中恙なく豫定通り二十七日の午後二時に、八日間お世話になつた淺間丸からさよならを告ぐることが出來ました。何日目の日だつたか社交室で寫眞をとつた折に、松岡氏と握手をして聯盟脱退前後の勞を感謝した。ホノルルをたつときにも非常な賑ひであつたが、横濱に上陸する折にも大した賑かさであつた。松岡氏が云ふ如く國際聯盟の脱退は外交として日本の成功したものではない。それだのにどうしてこんなに松岡氏が歡迎せられるのかと考へるに、同氏の聯盟における數回の演說は、我々日本人の云はんと欲する所をよく道破してくれたので、國民は自己の胸を破つてくれた勞に感謝するために、かやうな盛大な歡迎をするのであらうと考へた。これまで日本國を代表する全權が歐洲に派遣せられたことがあつても、今度のやうに熱心な歡迎振の發揮されたことはない。今度の松岡氏に對する歡迎振は通り一遍の挨拶ではなくて心からのものであることが發見せられます。

二十七日の午後零時頃淺間丸は棧橋から程遠からぬ所に止まつた。各新聞社からの飛行機が迎へに來た。又ランチに乘つて新聞記者達は早く淺間丸に這入つて來た。東京朝日新聞社の石川君がその中に交つて淺間丸に入り逸早く私の側に來てくれた。時事新報社の横濱支局長水上君は學生時代からの舊知であるので稅關その他のこと萬事よく運んでくれた。松岡氏の一行が船を出ると、私を迎へる人達が船に這入つて來た。家から總・すみゑ・宣・爽の四人が來た。金澤から吉田君、東京から岡本・石川・鳥

越・末吉・メーソン等の諸君、横濱からは鹿野・犬養らの諸君が見えた。中に殊に目立つたのは伊勢からわざわざ迎への爲に來られた石田君の陸軍將校の裝ひであつた。三時横濱の本願寺別院に立ちより、夕飯をよばれ、七時間近い頃東京本郷三丁目の佛教青年會館に入る。今晩此處で東京曉烏會が開かれるやうになつてゐるからである。多くの舊知の方が喜びをもつて迎へてくれられた。私は前後二席ハワイ旅行の狀況を語つた。目下帝國ホテルに滯在中のメーソン夫妻がわざわざ船まで迎へに來てくれられた御禮の意を以て十時頃からホテルに同君を訪ねた。角田・友松二君も來られた。十一時過ぎにホテルを辭し、日本橋の今津家に立ちより十一時五十分上野驛發米原行の汽車に乘込んだ。

今度歸國に際しホノルルの玉代勢君の二男繁君が未だ十四歳の少童でありながら僧侶になりたいといふ志願をもつてをるので私は日本に連れて來ました。

汽車が新潟縣の新井驛を過ぐる時、原田新十郎君その他の同行が十數人各〻思ひ思ひの品を携へて車窓に顏を見せてくれられた。町から建てた公園の釋迦堂を指して教へてくれた。この堂の本尊は、私が印度の佛陀伽耶から請來して來た印度發掘の本尊でまします。だから、なつかしみが深い。汽車が石動驛に止つたとき金澤から林君と平井夫人とがわざわざ迎へに來てくれられた。金澤驛にて澤山の迎へを受けた。五時二十分豫定の通り松任驛に着いたときには驛を埋めるほど澤山の人が迎へてくれられた。松任から自動車で家についたのは六時近くであつた。門へ這入ると本堂に禮し、墓を展し、村の人々その他遠來の人々に挨拶をした。小荷物の整理を終つたのは午前二時だつた。

本朝五時頃に眼がさめた。久振で家の中を見たいので床を出た。天氣はからつと氣持よく晴れた。どこもかも熱心に見廻つた。昨日から來てゐた志布志の暉峻君が九時四十分の汽車で福井に向うたのを見送つてかへると高光君が姿を見せた。藤谷・鳥越・道・北川その他遠近の人達が集まり、一時半先考の祥月命日の讀經をして貰うた。晝飯は例によつて筍と豆腐の田樂とであつた。法話の後百人ばかりの人に本堂で赤飯と筍とハワイから携へて來たパイナップルとの饗をした。夕飯には後れて來た藤原君そ

の他と賑かな晩餐會を開いた。人達はまだ酒に醉うて語つてをる中を眞田君と二人で逃げて出てこのたよりを認めてをる。船の中へ、横濱へ、東京へ、宅の方へ、無事安着を祝する電報を澤山頂いた。數ならぬ身をこれほどまで氣遣うて下さるを嬉しく思うた。

稍ミ氣が落ちついたためか少し疲れが出たやうだ。しかし、明日から又新しく働き出さねばならぬ。三ヶ月の不在中、村では五間長老人を始め四人の若い人達が死んでゐた。松任の中野君も死んでゐた。知人では能代の和田君、伊勢の市場君、鹿兒島の藤安君・竹下子、三河の太田老人・山田文昭君、その他澤山の人が死んだ。友人達の死を見るとき、私には、どうせ無い命だといふ感じが湧いて來るので、元氣よく働く心が起つて來るのであります。どうせ末が長くないのだと思ふと精一杯働く氣になります。だるむことなく勇猛精進したいものであります。

歸國早々過ぐる三ヶ月間私を世話をしてくれられたヒロの泉原君、ホノルルの玉代勢・安井二君を始め、ハワイ各地のお友達に對し又今度の私のハワイ旅行に對して深甚の同情を寄せられた諸君に對して此處に改めて謝意を表します。ちなみに行くときに同行した武雄は八月迄ヒロに止まることになつたので、かへりには私一人になつたのです。しかし、冥佑の下に無事にかへらして頂いた。私は本日は殊更如來の冥佑を感じてをります。

三月二十五日に戸畑の今川覺神老が東京を廻つて拙宅に來られた。二十六日に今江の願勝寺に行き肺炎を起し一時は大に騒いだが順調に運んで四月二十六日出發戸畑へかへられました。或は今度はお別れかと親類一同が心配してゐたので殊更今度の回復を嬉しく思ひます。自分を叱つてくれられた先輩の何時までもの御健在を念ぜられます。

此度はこれにて筆をおきます。諸兄姉の健祥を念じます。（昭和八年四月二九日—敏）